恋愛応援部っ！

EXDEATH

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
恋愛応援部っ！

【Ｎコード】
Ｎ０３５８Ｋ

【作者名】
ＥＸＤＥＡＴＨ

【あらすじ】
とある青年がいた。
その彼はある部活動の部長をしているのだった…！
主人公は根本的にモテない、キモイ、オタクの三拍子揃った、女子から見れば汚物に等しい青年が、悩める男女の関係を繋ぎ止める橋渡しをする、廃人青春破壊ストーリー。
そして時は動き出す…！

注意：この小説は不定期連載です。　しかもジョジョのスタンドを使うので少しクロスオーバーになるかも知れないので、苦手な方はお引き取り願います。

ｐａｒｔ，１　始まる活動。（前書き）

『君ならどうする？　この状況。』がスラ～ンプに入りましたので、適当に理性の捌け口として書いてみた。

駄目だな、俺。

感想を心待ちにしております。
誹謗中傷はいりません。

part，1　始まる活動。

恋愛とは、美男美女でやるものだ。

詠み人知らず

―時刻：午前６時４５分―

『ＵＲＹＹＹＹＹ！！』

辺りに奇声が響き渡る。

別に誰が言っているわけでもなく、この奇声の発生源は目覚まし時計。

「朝か…」

少年は渋々時計を止める。　そして再び、夢の世界へ飛び立とうと毛布を被る―わけでもなく布団から出た。

少年は時間を気にしながらも学校の制服に着替え、部屋を出る。

家は二階建てで、親はＳＰＷ財団という世界有数の企業で働いており、今はアメリカのＮ．Ｙにいる。

そんなわけで家に一人っきりだ。

去年までカッコいい兄貴がいたが、今は大学に通学する為に上京した。

炊飯器のご飯をお茶漬けにして平らげ、いそいそと玄関を出る。

おっと、自己紹介がまだだったな。

俺の名は『松下（マツシタ）　和哉（カズヤ）』。学年は二年生。

特技はピアノ。
ルックスは中の下、強いて言えば『涼宮ハ〇ヒのキ〇ンのちょっと下あたり』と言えば容易に想像は出来るんじゃないかな。
ちなみに『和哉』だ。和也でも無ければ一也でもないからな。

そしてここからが一番大事だ。
俺は『天候を自由に操る能力』を持っている。　ただそれだけ。
名前はもちろん『ウェザー・リポート』
元ネタがわからないなら検索するといいだろう。
俺はこの能力を『スタンド』と呼んでいる。
詳細は後述するけど、このスタンドをあることに使っている。でもなかなか便利だよ。

「あと２０分で駅に着けば十分間に合うな。」
大体７時２６分に電車は来るので、あと２０分で行けば間に合う。
しかも道で言えば１０分で行ける距離。十分だ。

ああ、ちなみに俺は全く女には全く縁が無い。
もちろん幼なじみなぞいない。幼なじみやそれに類する女の子が朝、家へわざわざ男の子を起こしに来たのはいいが「起きろ～！」なんて言っても起きないときに使う布団剥ぎを使った時に男の子の生理現象を目撃した挙げ句に男の子を殴り倒してそのまま遅刻―なんてことは一切ない。
あるのは『鈍感でモテるのに気付かないで女の子をやきもきさせる王道小説』ぐらいだ。　嗚呼、羨ましい。
まぁそんな妄想をしつつも徒歩十分。駅に到着した。

「お～い、松下！」

妄想をしていたら、いきなりマヌケでヌケサクな声が後ろから聞こえた。

声の主は自称アヌビス神、『伊藤（イトウ）　雄樹（ユウキ）』

コイツは自称モテない男と言っているが、実は裏ではモテるモテる。

ただ、鈍感で典型的なモテちゃう男なのだ。

対して、極力目立たなく行動し、空気を敏感に読みとり、いつでも皆さんの影（ＧＨＯＳＴ）である俺とは正反対なヤツだ。べ、別にモテたいとか、そういうのじゃないんだから！　か、かかか勘違いしないでよね！（調子に乗ってしまい、申し訳ない）

「伊藤、今日は何の日だ？」

「は？　入学式じゃん。　どんな後輩が来るか楽しみだな～」

相変わらずの脳天気だ、と松下は呟いた。

今日は入学式。　さてさて、どうなるか…

―絢爛学園―

絢爛学園―その名は全国に轟く美男美女の集まる私立高校。

絢爛学園―それは全国の中学生の羨望の的。

絢爛学園―それは『男子：女子＝３：７』という比率が成り立つ花園。

絢爛学園―それは全校生徒１２００人、つまり『総男子数：総女子数＝３６０：８４０』の元女子高。

そんな超激戦地を勝ち抜いた選ばれし人間だけが入学出来る高校の入り口に人だかりが出来ている。

「あの人だかりは…ああ、組み分けか？」
「行こうぜ～！」
脳天気な伊藤を連れてその人だかりに入る。
右も左も女子。女子だらけ。
揉みくちゃにされないように、キッチリ掻き分けながら掲示板の紙を見入る。
「えっと…何処だ？」
「A・・・B・・・C・・・D・・・E・・あった！　俺と松下は同じクラスだな！」
「マジ？」
「ほら、あるよ。」
そう言われて見てみると、見事に『伊藤雄樹』と『松下和哉』の文字が。
「行こーぜ。」
そんな訳で二人で教室へ…行けなかった。
いや、俺は行けたんだけど…
「あ、伊藤君だ！」
「カッコいー！」
という風に女子が群がってきたのよ。
もちろん俺は蛇の如く、ＧＨＯＳＴの如くその群棲から逃れていたのだが、伊藤はそういうわけにも行かなかった。

「松下Ｈｅｌｐ！　この人達勘違いしてる！　俺はモテない、キモ男なんだよォォォォー！」
「そんな謙遜するところ…イイ！」
「嗚呼、素晴らしいわ…」

伊藤の最期の灯火が輝いた気がした。
そして、俺はその灯火を息を吹きかけて消し、２－Ｅの教室へ向かった。
心配するな。精が尽きるまで遊んでこい。葬式には出てやるからさ。

―２－Ｅの教室―

ガラッと開けた。
開ける前はワイワイガヤガヤしていたのが一瞬の内に止まる。
別に時を止めた訳でもなく、ただ『刺すような軽蔑の目線』が女子から飛んでくる。
男子からは『ああ、女子からそんな目線を貰えていいな～』なドＭな目線と『同情するぜ…松下』という目線がこの私を貫くッ！
俺は冷や汗をかきながら座席を確認し、席について、机で寝た。
コレが自分の存在感を消す最善の策だから。
その時ッ！

「松下ぁぁぁぁぁー！　よくも逃げ出したなぁ！？」

とガラッとドアを開ける伊藤がいた。
刹那。
女子は喚声に湧いた。　あちこちから黄色い声が飛び交い、伊藤に群がる。
…よくそれで『モテない』なんて言うよな。
今頃救ってもしょうがないので無視して寝た。

「松下…助け…」

今度こそ消えかけの灯火が灯ったが、今度は水をぶっかけて消してやった。　ザマァミロ。

「はぁ、競争倍率高いわねぇ…」

俺にそう愚痴を言ってくる女子が一人いた。
名前は『柊（ヒイラギ）凛奈（リンナ）』。　学校の十五大美小女の一人。
髪はロング、黒、艶やか。美形、スタイル抜群。　成績上位者。
オールラウンドプレイヤーである。
その彼女が、この俺に愚痴を言ってきたのだ。

「ねぇ、どうしたら良いと思う？」
「知らん。自分で考えろ。」
「…もぅ、嫌いになっちゃうよ？」
「御勝手に。」

嫌いになるならどうぞ。
実際、俺は女という生き物が嫌いだ。無論、彼女も例外ではない
別に原因は無いんだが、なんとなく避けるようになった。
俺は三次元より二次元派だ。　多分そのことが女子が俺を軽蔑する要因の一つ何だろうね。

「はいはい、帰れ帰れ。」
「ちょ、今のは酷くな～い？」
「寝させてくれ。　今はあんたの戯れ言に付き合っている暇はない。」
「はぁ…だから嫌われるのよ。」

柊は吐き捨てるように自分の席に戻って行った。
やれやれ、と呟き、再び惰眠を貪る夢旅行へ旅立った。

―１２時５０分―

入学式が終わり、講堂からいそいそと人が出てくる。
伊藤は女に囲まれながら、松下は男子と雑談に花を咲かせ、教室に戻った。

「松下ぁ…疲れたよ…」
「伊藤…そろそろ自覚しろよ？　自分が凄く『モテる』ことによぉ～」
「バカな、俺がモテる？　あり得ん」

俺はこの鈍感さがあり得ん。

「ったく…今日の昼に第二文化室集合な。　久々に活動を再開する。」
「活動…ああ、『あの部活』をするのか？」
「要請が来ているからなぁ。　女子からの。」
「わかった。　終礼後に一緒に行こうぜ～」
「バカ、無理だから。」

そこまで話して先生が来た。　女の先生。
『はい、始めますよ』と、教壇に立ち、終礼を始める。
ちなみに名前は『姫宮（ヒメミヤ）　夏美（ナツミ）』。
やけに学生らしい名前だが、ちゃんとした教師でこの前大学を出たヒヨコ教師。２４歳。国語担当。独身で今まで彼氏無し。美人なの

に。
そして終礼が終わり、姫宮先生は出て行く。
「やれやれ…伊藤は女子に拉致られたし、文化室行くか。」
ぶっちゃけ、伊藤は拉致られていた。
多分彼は彼なりに貞操を守ろうと必死なのだろうな。　無理やり犯されるということがあれば、彼が○○○した―ではなく○○○された―と言うべきか。
で、『責任取ってよね』なんてことを数十人から言われてＳｃｈｏｏｌ　Ｄａｙｓの二の舞を踏むんだろうな…。ここらへんが血の海と化して伊藤の首がバックに入れられるのは最早時間の問題か。
なんて恐ろしいことを考えつつ、第二文化室へ移動する。
扉をガラッとスライドさせて中に入った。
「来ましたね、部長。」
そう言ってくるヤツ―論外無しにイケメンだが―の名は『前田（マエダ）　将（マサ）那（トモ）』。
見た目は花○院。　意外にいいヤツである。
欠点は『まさとも』を変換しても『将那』が出ないこと。
「彼は？」
「伊藤は…拉致られた。　おそらく、貞操を守る為にあらゆる誘惑から逃げているんじゃないか？」
「ああ、そうでしたか。　彼らしいですね。」
前田はフフッと笑う。　流石イケメン。笑みが似合う。
「じゃ、始めますか。『恋愛応援部』を。」

「ん、そうだな。　始めるか。」

そうして、恋愛応援部は始まった。

to be continue・・・

部員不足…

一つ、恋愛応援部とは、青春が謳歌できない生徒により設立。

一つ、他人の幸せを願う、正にボランティア部。

一つ、恋愛と冠ってはいるが、要請があれば手伝う部活。

それが―恋愛応援部。

「さて、今昼の一時。全員集まったところで会議するぞ」

第二文化室に集合したのは3人。

伊藤、前田、松下である。

伊藤は命からがら女子の包囲網をくぐり抜けて来たとのこと。　強姦される寸前だったらしい。

この第二文化室は松下率いる恋愛応援部により完全占拠されており、壁には『ジョ〇ョ』や『リリカルな〇は』のポスターやカレンダーが貼ってある。

テレビは完備、クーラー付き、しかもＰＳ３まである。無論、これらは学園の経費で落とした…というか恋愛応援部の顧問の姫宮先生が落とした。

「会議と言っても、なにすんの？」

「依頼はまだ来ていませんが…」

「なーにを言っている？　新入生獲得の為の会議だよ。これ以上増えなかったら流石にヤバい。」

部員が三人ということは、『部』ではなく『同好会』に分類される。この違いは大きく、活動できる範囲も決まってくるのだ。

「今年はなんとしても『部』として活動しなくてはならん。そのためには部員が不可欠。という訳でその対策を話し合おうぞ。」

「対策ったってよ～、何すんだよ？」

「それを話し合うんじゃないか。」

「そうですね・・・次の部活動紹介に出てはどうでしょうか？」

この学園はかなりの数の部活が存在している。しかし、あまりに多すぎる為にどこも部員不足に陥ってしまっている。

そこで、部活動紹介という行事があり、そこで新入生や2、3年生の帰宅部をターゲットとしたアピールバトルがある。

このアピール次第で進退が決まるのだ。

「しかし、あのアピールバトルは壮絶過ぎるなぁ…」

「何言っているんですか、『彼』がいるじゃないですか～！」

2人は『彼』を見る。

伊藤は2つの悪意のような目線に、冷や汗をかいた。

そして、悟った。『コイツはヤベェ…』と。

「よし、ムッフッフ…」
「…ヤバくね？」
「あなたならどうしますか？この状況。」
かくして、半ば伊藤を使用することに決定した。

―昼過ぎ：３：３０分―

「一で、結局何がしたいんだ？　俺達。」
あれから約二時間。　何をするか全く思い付かない。
狭い第二文化室で引きこもって何をすべきか・・・
伊藤はＰＳ３でＣＡＬＬ　○Ｆ　ＤＵＴＹをプレイ中。
前田は静かに外を見ていた。

「…なんもねぇなぁ…」

松下はペンと紙を机に置いたまま二時間前から進んではおらず、依然白紙。
大体恋愛応援部…いや、恋愛応援同好会はどういう風にアピールすればいいのか？　それが問題だった。

「前田、良い案は無いのかねぇ？」
ちょっと前田に話を振ってみた。
「案…ですか、あることはありますよ？」

「あるのか！？　さっさと言ってくれれば良かったのに…」

全く、あるなら二時間は考えずにすんだのに・・・

「依頼相手から直接アピールして貰うんです。
それなら考えずに済みますし。」

「・・・それは宣伝にしか使えないぞ」

まぁ確かに、それなら考えずに済むだろうが、問題はそこじゃない。
問題は部員不足だって！
そこまで考えて前田に頼るのは諦めた。
伊藤は依然ＦＰＳをやっているし…と、その時だった。

「ここかしら？　恋愛応援同好会ってのは…」

美しい女神、学園１５大美少女、柊　凜奈ともう一人、柊に負けず
劣らずの美少女の女子がそこに立っていた。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ・・・？

回想録

「貴様…そこで何をやっている？」

第二文化室のドアに立っている柊に質問した。
一体何をやってるんだ。そこで。不審者か？

「貴様って、酷くない？　私達はあなた達に協力しに来たのよ！」

「協力？　言っている意味がわからないな…」

美少女二人は部屋に入りドアを閉めた。
そして松下の向かいの席を占領した。
松下は眉間にシワを寄せたのを見て、柊は若干してやったり、的な笑みを浮かべた。

「そんなに嫌な顔をしないでよ。
私達はただあなた達の『恋愛応援同好会』に入れて欲しいだけ。他意はないわ。」

「どうだか。お前達はただ伊藤の側に居たいだけだろう？」

「あら、よく分かったわね。そう、『私』は伊藤の側に居たいだけ。
私は、ね」

なんか突っかかる事を言う。
お前は伊藤が好きだからここにいるだけだ、と言おうとしたところでやっと隣の少女に気付いた。

「そちらの方は誰だ？」
松下が鋭く刺すような目線を送った時、少し『ひゃっ』と怯えた。
別に脅かした訳じゃないんだが。
「あら、知らないの？　この華憐で可愛らしいのは『長嶺（ながみね）　沙羅（さら）』。学園１５大美少女の一人よ。知らなかった？」
「俺はそんなもの興味はない。結局年を取れば老けるからな。」
柊はあちゃ～と残念そうな顔をした。
教室で喋った時はもうちょっとお淑やかだったんだが…猫被っていたのか？
「で…長嶺さん、で合っているよな？」
「あ、はい！　長嶺　沙羅と言います。よろしくお願いします！」
何をお願いするんだか。
先が読めん娘だな。こういう娘は扱いが難しいからな…
「で、長嶺は何故にここへ？」
「うわっいきなり呼び捨て！」
「ちっと黙ってろ。」
松下は柊を戒める。
全く、女の子の扱いが成ってないんだから、と柊は溜め息をついた。
「り…理由ですか・・・？」

長嶺はふとチラッと前田の方を見る。
それも少し頬が赤い。
前田は窓から吹いてくる春先の冷たいが少し暖かい風をジッと感じていた。
それを、長嶺はチラッとみた。チラッと。
無論、松下は見逃さなかった。

「あーＯＫＯＫ。もういい。志願動機は理解した。」
「ひぇっ！？　どうして？」

長嶺はあたふたしながら顔を真っ赤にしている。
うーん…可愛らしいと言えば可愛らしいんだろうが、やはりそれを引き立てているのはこういう天然具合か？

「おい、前田…ちょっとこっち来てくれ。
伊藤…ＦＰＳを止めてちょっとこっち来い。」

松下は他二人を集めて教室の外へ出た。
そこで、彼らに聞いてみる事にした。

「どう思う？　あの二人を入れるべきなのか？」
「私としては入れた方が無難かと。
そうすれば部に昇格出来ますし、何よりアピール内容を考えずに済みますし。」
「伊藤は？」
「…俺はモテない筈。」

伊藤は柊が自分目的で聞いて少し赤面しているようだ。　まぁそんな状況でもキッチリ敵を撃ち殺す集中力は凄いが。

「しかし…なぁ。」
「私は別にいいですけれどね。」
松下はしばらく考えて、結局、予算と部への昇格の為に二人を受けいれる事にした。
ぶっちゃけ、この部に入れるのはあまり快く思わなかったのが本音だが女子がいると相談数が増えるというのも理由の一つだ。
その吉報を携え教室に戻りこの事を伝えた。
すると、柊は『当然ね』といいながらもにやけていたし、長嶺に至ってはこちらに感謝の言葉を連発する有り様。
まぁ、別にいいんだけど…早く入部届に書いてくんないかな？
それから二人は入部届を書き、姫宮先生の所へ行った。
「マジで良かったのか？　俺の”能力”がバレるかも知れん…」
今、彼女らを入れたことによって危惧しているのは、松下自身がもつ”能力”についてだ。
この能力はジョ〇ョの第六部、石海に登場するキャラの超能力と全く同じ能力。
それは『天候を自由に操る能力』であり、能力のことは部の関係者以外秘密にしている。
「でも、私達以外には見えませんから万事ＯＫじゃないんですか？」
そう、何故か分からないがこの部にいる人間全員が、松下の能力『ウェザー・リポート』の形が見えているのだ。
しかも顧問の姫宮先生までが。
「確かに、”普通”の人間なら大丈夫かも知れないぜ～？」

「”普通”だったらな。　ぶっちゃけ、あんたらも”スタンド”持ってんだろ？」
「ねぇよ。」
「あるじゃないか…女を近付ける能力がよ」
実際いつも思うのだが、伊藤はスタンド使いだと思う。
それが潜在的なモノだとしても見えている事には変わりがなく、”スタンドが見える能力”というわけじゃない筈だ。
「別にこの教室が”弓と矢”的なわけじゃあるまいし…」
「とにかく、見えないように祈る事ですね。　女性は口が軽いですから。」
噂ってのは1日経てば皆が知っていたりする。
それを広めているのは大抵女性であるのは周知の事実だ。　やれやれ…
「…もうすぐ4時か。　そろそろ終わろぜ。」
昼で今日は終わりなので今学校にいるのは部活動の連中のみ。
昼から四時間経ったがこの教室に来たのは柊・長嶺のみ。　多分これ以降の人手は見込めないだろう。
伊藤はＰＳ３の電源を落とし、前田は読んでいた本を閉じる。
その時。
「承認してもらったわよ！」
「承認…ですぅ！」
娘二人が騒がしくドアをブチ開けてきた。　壊す気か？

「やれやれ…」

松下は溜め息を吐くと、これからの起こるであろう出来事に、ただただ頭を悩ませるのだった。

―夜―

帰宅した松下は早めに夕食を採り、コタツでゲームに興じていた。その時、いきなりケータイの電話専用に設定している着メロが鳴り響いた。

「ったく…せっかく人がゲームしてるってのに…」

そう呟きながらもＰＳＰをスリープにしてディスプレイを開く。そこには見覚えのない番号が。誰だ？と、疑問に思いながらも渋々出てみた。

『夜更けにごめん。柊だけど…』

柊だった。

「部活動について相談があるんだけど…『ブチッ』……」

少し強制的ではあるが問答無用でシャットアウトした。可哀想だとはまったく思わん。それより第一何故俺の番号を知っている？そこが問題だ。そして再びケータイが鳴る。

「もしもし…」
『勝手に切るな！』
「お前…どこで俺の番号を知ったんだ？」
『番号だけじゃないわよ。あんたのアドレスまで判明してるわ。』
「誰に聞いた？　よもや女子からか？」
『さぁ？　誰からかしらね？』

これだから女性は侮れない。俺が思うに、どこかに巨大な女子ネットワークがあってそれにアクセスすると、瞬時に相手の情報がわかる…なんて疑っている。

「…もういいや。で、結局なんなんだ？」
『だから、部活動よ！』
「恋愛応援部の何を知りたいんだよ？　ったく…」
『活動時間について。』

小さいことで電話するなよ。電話代が掛かるんだから。

「基本的には土日休み、あとは適当に毎日だべってる。」
『活動内容は？』
「えーっと…基本的には相談者の恋愛を成就、もしくは近付けること。大体告白の雰囲気までをセッティングするのが俺達の仕事だ。成就すれば万々歳だし、もし振られてもそれは本人達の問題だ。」
『へぇ…他には？』
「大体要請されたらする。学園から掃除してくれと言われたらするし、基本的にはボランティア部に近い。」

大体何故この部が公式に認められている理由は、学園側の要請が通りやすいからだ。
選管をやれと言われたら手伝うし、その他色々なことを手伝う。

「大体恋愛”応援”部だからな。基本的には”応援”する部活動だ。分かったか？」
『ん…大体。　あ、報酬は？』
「報酬…基本的にはボランティアだからなぁ・・・ロールケーキ一個だ。」
『安ッ！』
「ま、所詮”応援”部だからな。」
『まぁまぁ分かったわ。ありがと。じゃあね。』
「アリーヴェ・デルチ」
そこでイタリア語で電話を切った。
「しかし…どこで俺の番号とアドレスを…？」
そう疑問に感じながらも、再びゲームをプレイし始めた松下だった。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．？

回想録（後書き）

スラ～ンプ中。
泣ける。
ＰＴＰか…

野道

―朝：晴れ―

トラトラトラ、本日は晴天なり。
空は雲が数個浮かんでいるぐらいの晴れ。
すがすがしい程晴れに晴れている。
そんな中、学校に行く前に洗濯物を干している青年が一人。

「あ～晴れたな。キッチリ。」

パンツを洗濯バサミに噛ませながら呟く。
続いて白いシャツをハンガーに掛ける。

「これで…よし。」

洗濯物を干す、という任務は完了し、一度家に入り荷物を取ってくる。
その間約一分。　無論昨日のうちに持って行くべき物はぶち込んである。置き勉も常習犯だ。

「さて、出撃しますか。」

最後に定期券の確認をしてドアの鍵を掛けた。　完璧。
忘れ物は一切ないことを確認して自転車で駅に向かう。
自転車は勿論防犯対策バッチリ。取られる心配は皆無に等しい。
駅について電車に乗り込み、ＰＳＰにイヤホンを接続する。
目的地に着くまで大体２０分ほどかかるので、その間の暇つぶしだ。

ＰＳＰをスリープから解除し、選曲。
今日の気分は晴れ晴れしているので、あえて神曲『鳥の詩』をチョイス。

『消える飛行機雲　僕たちは見送った…』

この時点で、マジに泣きそうになった。
以前恋愛応援部のメンバーでカラオケに行った時にこれを歌って途中で三人揃って号泣したっけ…
この曲を聞いていると、最終的に死んでしまうヒロインを思ってしまって泣いてしまう。
ゲームは勿論プレイ済みで恋愛応援部の連中にも貸したのよ。　で、全員号泣。
次に選曲したのは『再臨：Ａｄｖｅｎｔ－〇ｎｅ－Ｗｉｎｇｅｄ－Ａｎｇｅｌ』。
朝の眠気覚ましには最適だ。　ギターの音も最高だ。最後の『セフィ〇ス』の所は痺れる。

まぁそんな曲を聞きながらいると、既に目的地に近くなっていた。

「さて、眠気は吹き飛ばしたし行くか。」
ＰＳＰをスリープにしてケータイの電源を落とす。　サイレントが実装されてはいるがそれだけでは心許なく、直接電源を切るのが松下の中では定着してしまっている。

電車を降り改札をくぐり抜け学校へ向かう際に通る坂を登る。
本当にどうでもいいが、何故絢爛学園高校はこんな九州の田舎のＮ崎県に置いているんだ？
普通なら都会に置いてもおかしくない程有名で尚且つ広大な面積。
しかもお金持ち。

学園を出たらその先には絢爛学園大学。恵まれ過ぎている上に更に一流企業の社長令嬢が多い。なんという素晴らしい学園か。
しかし、N崎県は坂が滅茶苦茶多く、この今登っている坂も別名”絢爛坂”だそうな。
理由は何てことはない、ただ美人の女子が沢山登っていくのを見た他高の男子が『煌びやかで美しい』と言い、更に絢爛学園という2つの意味で”絢爛坂”更に別名”美人坂”という名前を拝命した、という。

「ま、沢山の女子がいるから目の保養にはなるからいいが…長い・・・」

この坂は実は滅茶苦茶…という程長くは無いがそれでも十分長い。夏には汗にまみれて制服が透ける女子が多発するため、それを目当てに出没する輩もいる。無論、その輩は『ちょっとこちらへ』と黒いスーツに身を纏った男二人に連れ去られた…という話があるらしい。

とにかく、この絢爛坂を登りきり学園に入った。玄関口まで行き、靴を履き替え、教室に出向く。

「おっはー松下」
「…古いぞ。　一体何年前の人間なんだ？」

やや古い挨拶をして来る人物は伊藤だった。　おっはーって…小学生ですら言わんぞ。

「おっはー」
「……」
「おっはー」

「…お…っは…」
「グッド！」
今日の伊藤は何故かＨｉテンションなご様子。
まぁあと数分でＬｏｗになるでしょうが。
「で、なんのようだ？　朝っぱらから１０年前ぐらいの雰囲気を醸し出しやがって…」
「いや、好きで出してないぞ。」
「慎吾ママが好きだったんだろ？」
「…あの時は。」
誰だって好きだった。恥ずかしながら俺だって好きだったさ。あん時はな。
あの時は小学生。初恋を体験した俺だ。
「で、本題に入れ。」
「ん、ああ…実は裏情報で、美少女アンケ…ってうわあああああ！」
どこからともなく、怒濤の羊の如く、女子の軍団が伊藤を拉致していった。…そろそろ問題になるんじゃねーの？
まぁいいや。いつものことだし。気になるのは伊藤の美少女アンケ…アンケートか。　一体何なんだろうか？　予想では学園美少女一位を決めるアンケートなんだろうな。多分。
その時、姫宮先生が教室に入ってきた。　今日も鬱そうだ。
『はいはいさっさと席につけ～…朝礼初めるぞー。　あーやってらんね…』

先生どんだけ鬱なんだよ…仮にも名前に可愛らしい”姫宮”って付くんだからもう少しお淑やかに…

『なんか言いましたか？　松下”君”？』

「ごめんなさいごめんなさいマジに許してください」

この先生、ぶっちゃけ怖い。優しいんだけど怖い。

一部では”タダのツンデレでは？”なんて言われているが、おれは信じない。絶対に。

『伊藤は？　彼はまたスターリングラードか？』

先生は軍事オタクな生徒Ａに質問する。

生徒Ａは立ち上がり、敬礼した。

「はい。恐らく彼は今戦場です。しかし、いつもの帰投時間を過ぎています。彼なら適当に約３０秒で帰投するはずなのですが―」

『未だ生還せず―か。』

「そのとおりです。恐らくは―いえ、何もありません。」

「構わん。話せ。」

「わかりました。　恐らく彼は敵勢力に捕まり、強制的に強姦―いえ、使役させられているものと。」

彼の推理は少しひどいが、あながち間違いではない。

それくらい平気で犯る、それが”伊藤突撃隊”。　総数１３人。特技、拉致。

『そうか…彼は…死んだか…』

「はい…残念です。」

まで、死んじゃいないだろ。多分。

『バカ野郎…先に逝きやがって…』

「く…うう…」

『だが、我々は彼の屍を乗り越えなければ―この先の戦いには生き残れない！　彼の死を無駄にするな！！』

「く…了解！」

ちょいまて。何をコントしてんだお前たちは…

「伊藤…ただ…いま帰…投しま…した…くふぅ！！」

「「伊藤！！」」

その男…いや、漢はドアを開け、今戦場から帰ってきたぞ、といわんばかりの疲労感を醸し出していた。

その伊藤は口を抑えながら床に崩れ、その周りに人が集まる。

『伊藤！！　しっかりしろ…まだ死ぬんじゃないッ！！』

「先生…俺は…伊藤雄樹は…ここに…あなた達に…あなた達だけの心に残す…最後の一帰還報告（デブリーフィング）を…う！」

『伊藤…しっかりしろ！！　おい！」

「もう、ゴールしても…いいよね…？」

『伊藤？　おい、伊藤…イトオォォォォー！！』

漢は風になった…

その死に様を、彼の最後に、教室の男子は涙し、無意識の内に敬礼をしていた―

―朝礼―

『そんなコントは置いといて、とにかく始めるぞ。』

伊藤は見事に復活し、今は席に着いている。

はっきり言わせてくれ。　バカ。

『―という訳で今日も昼で終わりだ。　昼まで勉学に励むよーに。以上！』

その後号令がかかり、朝礼は終了、この後の教科は英語、数学、国語、現社だ。ああ忌々しい忌々しい。

「あら、松下くん。こんにちは」

「寝させろ。」

柊がいきなり話し掛けてきた。こちらは生憎眠いんだ。素直に寝させて欲しいものだな。

「あら、寝させないわよ？」

「その言葉は将来の旦那に言え。俺は生憎あんたの旦那じゃないんだからな。」

「もう…下品ねぇ～」

「どうとでも言え。　俺は知らん。」

「と・に・か・く、お昼一緒に食べない？重箱に入れて来たのよ」

何故今朝っぱらに昼飯のコトを切り出す？

「昼飯か？…どこで？」

「青春の憩いの場、屋上よ。」

「…狙いは伊藤か。」
「Ｅｘａｃｔｌｙ．　ああ、恋愛応援部の人も呼んだら？」
「当たり前だ。　俺は単独で女子と飯は食わん。」
「じゃ、そ～ゆ～事で。　じゃあね！」

やれやれ…昼飯を買わずには済んだが…ちと肩身が狭くなるのは必至だな。
そして、刻々と時間は過ぎてゆく…

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．？

野道（後書き）

スタンド使ってねェー
恋愛応援部の部活動シテネェー
相談来ねぇー
ただだべってるゥー

ちなみに昨日はキラークイーンとディオ様とウェザーが好み。異論は認める。

昼飯を食べに行こう　その１

高校生になってわかった事がある…
現実は二次元のように素晴らしい学園生活は無く、美人はほぼいないということ…
それから、ラノベのような恋愛は夢に見ないことだ。現実が辛くなるから…

ｂｙ　作者

「おい、前田飯食べようぜ。」

地獄の勉強を終えて今は昼。ご飯の時間だ。
学園生活の中で一番の楽しみである。

「わかりました。では食堂へ行きましょう。」
「ちょいまて。今日は久々に弁当が食えるぜ。しかも女子が作った、な。」

そう、今日は学園１５大美人の一人、柊が直々に作った弁当が我々の胃袋を満たしてくれる。　女子が作ったものであるが故に味は保証出来るだろう。

「では、あなたについていきます。楽しみです」
「次は伊藤だな。第二文化室か？」

―文化室―

「伊藤～いるか？」

「なんだ？藪からスティックに…」

些か古いギャグ（？）をよく堂々と言えるものだ。感服せざるを得ない。

当の伊藤はゲーム中だった。

「今から柊の自作の弁当を食いに行くんだが付いて来いよ。最近まともに食ってないんだろ？」

最近我ら三人はパンなどの軽食が多い。弁当なんて久しぶりなのだ。ここで栄養を補給しなくては次何時になるか分からないからな。

「柊…か。オーケー。」

ＰＳ３の電源を落とし、静かに『ダンッ』と擬音付きで立つ。ううむ…必要あるのだろうか…

三人でゾロゾロドアを開けて廊下に出ると、何故か長嶺さんがそこにいた。唐突だ。

「ああっと…長嶺さんか。どうした？」

「ええっと…警告しとこうと思って…。柊ちゃんの弁当について…」

「弁当…？　それが・・・」

なんかモジモジしている。ううむ、可愛いと言われれば愛玩動物のように可愛いのかもしれない。　上目づかいするのもグッとくる。

興味はないが。

「それはですね…」

「沙羅ちゃ～ん！　あ、いたいた沙羅ちゃん。」
その言葉の途中で運良く居合わせた柊に捕まってしまった。
「む、男達も早く来なさい。屋上よ屋上。」
「分かっている。今行くところだったんだ。」
男達三人は柊と歩こうと一歩踏み出そうとした、その時だった。
「ま…松下さん！お茶は必ず買っといて下さい！　彼女の弁当は…きゅうううううん！」
柊に強制的に胸を揉まれ絶叫なのか歓喜なのか恥ずかしいのか、色々な意味のこもった鳴き声を発する長嶺。　愛玩動物そのもの。
　そのまま柊は長嶺さんは柊に連行されて行った。
「お茶…？」
「何がなんだか分からんが買いにいくか。喉乾くだろうし。」
男達は食堂の横にある自動販売機でお茶を購入し、屋上に急いだ。
そして、その判断は正に”英断”であった…
―屋上―
屋上に到達した三人は柊らを見つけ、その横に腰掛けた。
実際お茶を購入しに走っていたので腹はかなり空いている。さぁ、目の前にある二つの重箱を開けてくれ。
「右の重箱が私の作ったやつで左が沙羅ちゃんの作った弁当よ。さぁ、まずは私の作った弁当から先に食べなさい！」

重箱と言っても結構ちっちゃいのだが。
とりあえず右側の箱を開けてみると箱は小さいがいろとりみどり。
豪華。
とにかく最初に右の箱の肉を突っつく。
「んじゃいただきます。あむっ……うっ！！」
口に入れて三秒後。　事件は起こった。
突然目の前がクラクラしてきたのだ！
（な……なんだ！？いったい…）
お茶を取ろうとするが、脚に力が入らず立つことが出来ない。
（こ…こんな！バカなッ！あ…脚に…力が…脚に力が入らんッ！たっ立ち上がれないッ！）
遂にはウェザー・リポートを使っていないのに虹が見えてしまう…ナメクジ？マイマイカブリ？
（頭痛がする。はっ吐き気もだ…くっぐう…なんてことだ…この松下が……気分が悪いだと…？　この松下があの柊自作の弁当に感覚を破壊されて…立つことが…立つことが出来ないだと！？）
「どうした、松下？　うまくて言葉に出ないか、そうか。じゃ俺も。」
「じゃ、私もいただきます。」
次々に自ら死地に赴く戦士が二人。
彼らはハンバーグをつまむッ！！やめろォオオオオ！！　その絶望

的な味を知らないで食うんじゃない！

「「……」」

バタッ

倒れたァァァァー！！

「おい…柊…そこにあるお茶を取って持って来い。」

「えっ？　どしたの三人とも？」

「早く持って来いッ！！　スチュワーデスがファースト・クラスの客に酒とキャビアをサービスするようにな……うっ…」

再び強力な吐き気に襲われる。それでも吐かないのは女子の目の前で吐くことは恥だとする男の意地だろうか。

「意識が飛ぶ前に…早くッ」

「ああ…沙羅ちゃん、渡してあげて」

長嶺から渡してもらったお茶を飲む。それでなんとか吐き気は止まった。

しかし、まだ彼らが残っている。自ら死地へ赴いたバカ共が。

（こ…こいつは…きついぜ…い…いかん…このまま意識を失うとマジに…逝っちまうぜ…）

伊藤はかろうじて意識を保っていた。しかし、この苦しみは何よりも耐え難い、まさに拷問と呼べる域であった。

（笑い話にもならねぇ…このまま柊の弁当で死…死んじまったら…）

「伊藤！口を開けるんだ！死ぬにはまだ速すぎるッ！！」

松下は伊藤の上半身を起こし、そのまま口にペットボトルの口を押し当てお茶を流し込んだ。　詰まらないように気道も確保してある。

「う…げほげほっ！　あ～」

その時、伊藤は完全に意識を取り戻したようで思いっきりむせている。

まぁなにがともあれ、良かった。

「生き返ったか…次は前田だ！！」

前田は、薄れゆく意識の中で、こう思っていた。

（だめだ…致命傷のようだ。声も出ない。指一本さえ動かせない。今昼の１時１５分　か…父さんと母さんは何をしているのだろう…まだ仕事中なのだろうか？心配かけてすいません）

前田将那が最後に思うこと…

それは両親の事ではなかった。

両親のことを深く思ってはいたが最後に浮かんだ『奇妙な疑問』の前に、両親たちへの思いは頭から吹っ飛んだ。

（僕の『味覚』は舌に触れるものの味がわかる…だが…今…『味覚』は柊弁当に完全に破壊された…！？　なぜ！？）

彼は朽ちゆく意識をなんとか繋ぎとめ、『奇妙な疑問』について自問自答する…

（なぜ味わった後ではなく…少しの時間差もなく一万分の1の差もなく『味覚』が破壊されたのか？なぜ…？　味覚が…味が……『味』）

その時、前田の目に光が宿った。まぁ開いてないが。

（わ……わかった……ぞ…な…なんてことだ……それしか考えられない…『調味料』だ……柊は『調味料』を根本から間違えたのだ……さ…悟らせなければ…このことをッ！　この恐ろしい事実をなんとかして…なんとかして柊自信に悟らせなければ……このままだと…死亡者が出てしまう…）

「前田ッ！！　お茶だぁ飲めェェェェー！」

松下は前田にお茶を含ませた。すると、だんだん前田の目が開いてきたのだ。

「……柊さん」

「な、なによ…」

「次からは必ず長嶺さんと『一緒に』作ってきてください。絶対に。」

「な…！」

男達は既に顔面蒼白である。

てかコレバイオ兵器に匹敵するだろ…何をしたらこんなになるんだよ？

「柊さん、次からは必ず、私と一緒に作りましょうね？」

「うーん…まぁしょうがないか。」

何が”しょうがない”だよ！！

伊藤と前田に至っては死にかけたんだぞッ！！

ったく…とゆーわけで、続く。

to be continued・・・？

昼飯を食べに行こう　その１（後書き）

やはり私がデビューしたら”ＥＸＤＥＡＴＨ先生”って呼ばれるんだろうか…

昼飯を食べに行こう　その2

結局、恋愛なんてものは美男美女でやればいいと思う。
恋愛において女子にモテるのはいつもイケメンだ！

ｂｙ昨日

「お口直しに食べませんか？　こんなことになるだろうと思って作って来たんですぅ」

流石ッ！！　長嶺さんはこんなところにも気を配れる、素晴らしい人物だ。さっきの柊弁当はバイオ兵器になっていたが、彼女なら大丈夫であろう。
　長嶺はいそいそと何処からか2箱目…3箱目を取り出してきた。

「今回はあまり時間がなくてありあわせですが…」

長嶺さんは一箱目をパカッと開ける。そこにはチーズとトマトが入っており、保存のために保冷剤も入っていた。なんと気が利く娘であろうか。
嫁にもらう男はなんと幸せ者か。

「えっと、前菜（アンティパスト）はモッツァレラチーズとトマトです。そのまんまですね！」
「う～ん…この組合せはどこかで…」
「どうぞ、お食べ下さい。」
「じゃ、俺が。」

伊藤は箸で綺麗にチーズを切り、口に運ぶ。
「ん～まぁウマいんじゃないの。でもなぁ～なんか足りないというか…」
「違いますよ。トマトと一緒に食べるんです。」
「トマトと？　…ま、いいか。はむっ…」
トマトの上にチーズを乗せ、落とさないように口に運ぶ。
伊藤は、その味の評価を、下した。
「ウンまああ～いいい！！こいつぁ最高だあああああ！！」
「あ…そんなにおいしいですか？」
「ああ、最高だぜ！！　なんつーかトマトの甘酸っぱさがチーズのとろとろと相まって駆け落ちしたかのよぉ～」
既に涙を流している…ってか前菜はそんなにウマいのかね？
「そんなにおいしいかなぁ…はむっ！」
伊藤のオーバーリアクションに疑問を感じたのか長嶺自身が食べてみている。
さて、どんな反応か…
「はあっ！おいひい…ああん…おいちいでちゅぅ…」
「はん！　沙羅ちゃんったら、可～愛～い」
「うむ…愛玩動物の本領発揮か。」
「彼女は愛玩動物ではないんですけどね…」
写真で永久保存したいほど可愛らしい長嶺をなでなでしまくる様子は、さしずめペットと飼い主のようだ。

ま、とにかく食事を続けよう。

「この箱は？」

「その箱はパスタでちゅぅ…みんなでわけて食べましょう。」

言語中枢を破壊したのだろうか？長嶺の言葉が少しおかしい…まあいいや。可愛いから何でもオーケーだ。

「唐辛子入りパスタか…どれ、私が先陣を飾ろう。」

松下は箸を使ってパスタを紙皿により分ける。このパスタはテキトーに長嶺の母が作ったらうまかったということで娘にも伝授された逸品らしい。

ちなみにチーズをかけて食べる。

「…ンまあああい！！　味に目覚めたァーっ！」

松下は更に紙皿に入れおかわりをしまくる。そのことに気付き、周りもせっせと確保していく。

「「「ンまあああああい！！　最高だあああああ！！」」」

これはマジにウマい。そんじょそこらの店より遥かに上だ。　なんつーか品格からして上等だ。もはや嫁に欲しいくらいだ。

「えっと…メインディッシュはハンバーグです。　沢山あるのでいっぱい食べてくださいね！」

「ハンバーグか…今度のは長嶺が作ったモノだから安心だな。」

「悪かったわね。下手で。」

と、柊は小言を言いつつもきっちりハンバーグに箸を伸ばす。
それを小さく切り、口に運ぶ。その瞬間、柊のハンバーグとは比べモノにならない美味しさが口一杯に広がる。
もはや神の領域であった。

「ウマい…流石長嶺だ。」
「ありがとうございます！」
それに合わせてご飯まで出てきたのですんなりと胃袋に入っていく。
約１０分で全て平らげてしまった。

「ふぅ、うまかったな。グラッツェ長嶺。」
「ありがとうございます。」

長嶺は弁当箱を片付け、それらをバックに入れていた。ううむ…あれだけの量を一人で持ってきたのか…？
松下はその疑問をぶつけてみた。

「いえ、車に乗って来たので歩いたと言ってもそこまでありません。」
「な…る。そういや長嶺ってお嬢様みたいだよなぁ…愛玩動…愛くるしいし。」
「え…あんた知らないの！？　長嶺と言えばかなり有名よ！」

その柊によれば、長嶺と言えば日本中の中でもかなり有名らしく、そこの跡取りムスメが沙羅だという。
思い返してみるに、確かに長嶺って聞き覚えはある。長嶺ブランド…だっけ。

「車、電気、ゲーム…これらの多くは長嶺グループが支援していたりするわ。つまり、沙羅ちゃんはかなりの金持ちなのよ。全く、ど

んだけ遅れてんのよ…」

なんか悪態をつかれたのはスルーしよう。
なるほど、長嶺はかなり金持ちか…知らんかったなぁ俺。
恋愛応援の議題にも登らなかったし。
その後幾つか柊に小言を言われたが全て無視した。
しかし、突然雨がポツ…ポツと降ってきた。どうやら気づかぬ間に雨雲が来ていたらしい。

「はぁう〜！雨が降ってきたみたいですぅ〜早く中へ入りましょう。」

そういう長嶺と柊はパタパタと室内に駆け込んで行った。やれやれ…

「松下さん、私は傘を持ってきてないんですよ…」

それは暗に”やれ”と言うことか？
傘ぐらい持って来いよ…やれやれだぜ。

「仕方ないなぁ…『ウェザー・リポート』！！」

松下は自分の背後にスタンドを出現させ、天候を操る。
すると、さっきまで空を覆っていた雲が急速に四方へ拡散するのがわかった。

「流石です。スタンド…いいですね。」
「欲しいか？　だったらホワイトスネイクを連れて来てくれ。」
「無理ですって。じゃ、私たちも第二文化室へ行きましょう。」

ううむ…君たちはやはりスタンド使いではないのか？　ボカァそう

思うよ。
スタンドはなぁ、マジに便利なんだ。見えなきゃ法律に触れやしない。『天候を自由に操る能力』を応用すれば自然を守ることもできる。

「スタンド…か。同じ能力者がいないから寂しいんだけどね。」

スタンド使いは引かれ合うという事は昔から言われている。それは同時に死ぬまで戦い続けなければならないと解釈も出来る。
しかしながら、引かれ合うとは言ってもスタンド使いがそうそう居るわけでもなく。
学園に現時点でただ一人と見られるスタンド使いってのは寂しいものです。はい。

「なぁ、柊達がこれから俺のスタンドが見える確率は？」
「そんなの未知数ですよ。スタンドが見えても驚くぐらいしか出来ませんし。」

柊達がこれから俺のスタンドが見えるようになる、というならどうしようか…

「まぁその時次第、て事です。」

投げやりだ。
一理あるってのが癪に触るがそのとおりなので敢えて口出しはしなかった。
全てその時次第なのだ。見えたら仕方ない。そういうことだ。

「さて、着きましたよっと…先客がいるようです。」
「なに？」

第二文化室に到着した俺達を待ち受けていたのは、相談依頼者とおぼしき女子生徒だった…！

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．？

昼飯を食べに行こう　その２（後書き）

脳が『眠いよぉ～お兄ちゃん』と妹系の可愛らしい声に三度ほど執筆中に寝落ちしながらの投稿。
書き上げた後の見直しはしておりませんのであしからず。
じゃ、睡魔に襲われに行きますね。

来訪者…

恋愛？
君はそんな一時的な気の迷いで一生を棒に振る気ですか？
そんな3分の1も伝わらない純情な感情より二次元に恋をしたほうが良いのです。

―作者の思想―

「―そういう訳で、我が恋愛応援部に依頼したい、そういう事か？」
「―はい。」

いま、男三人はある女子生徒から依頼を受けている。
内容はそのまま『恋愛を成就させてほしい』だそうだ。

「良いですか？私達はサポートする側、つまり旅行会社みたいな組織です。実際に行動するのは貴女自身と言うことを覚えていて欲しいのです。」

前田は優しく諭すように語りかけ、彼女の緊張を和らげようとする。
まぁ、恋愛の相談を男三人相手に話すなんて恥ずかしいのだろう。
だが、そういう時の為に女子を入部させたのだが…何処に行ったんだ？

「…ちと待っていろ。女子を呼んでくる。男子より女子の方が話しやすいだろ？」
「あ、はい。すみません…」

性格は柊より聞き分けは良いほうか。あの猫被りムスメよりは。

「あの…」
「はい？」
「女子の方は誰ですか？」
彼女は端的に聞いてきた。
「あーっと、柊と長瀬だ。」
「柊…というとあの１５大美女の、ですか？」
「ああ。柊　凜奈。」
「で、長嶺さんも…ですよね？」
「ああ。長嶺　沙羅。愛玩動物だな。」
そんなに有名人だったのか…彼女らは。正直驚きだ。
「んじゃ、探してくる。」
そう言って松下は教室を出た。
その後はしばらく歩いた。約、一時間。ええ、探しましたとも。一時間。で、結局たどり着いたのが図書室。
長嶺が読書好きということからきた直感だ。
「…いた。」
で、いました。二人揃って本を読んでおりました。
「ん、松下？何の用。」
「あんた達を探してた。依頼者の対応をお願いしたくてな。」
柊は『世界虐殺歴史』というなんとも奇妙な本を閉じると、長嶺と

相談を始めた。しかしなんつー本読んでんだよ…

「ちょっと待って。」

なんか女子同士の”秘密の相談”とゆーモノをするのか？まさか俺の悪口…はないな。長嶺はそんな奴じゃない。柊は知らんが。

「まとまったか？」

ゴニョゴニョの典型的な相談だなぁ。普通に相談すりゃいいのに。

「すみません。行きましょう。」

「全く、何の相談だよ。」

長嶺は『世界拷問道具』なる本を閉じると棚に戻した。ってこの人達はどんな趣味なんだ？理解できん。

―戻って第二文化室―

図書室を出て第二文化室に戻った。松下以下二名は結局一時間１０分程女子生徒を待たせたという事になるが仕方ない。

「わかったわ。この件は私達恋愛応援部が責任をもって解決させて頂くわ。」

「本当に！？　ありがとう～」

……なんだこの虚無感。

別に虚無僧になったつもりはないんだが、かなりこういった話は…

耐えきれん。伊藤と前田は外に出ていったし、俺は部長だし、この『恋バナ』という忌々しい、やかましい話を聞くハメになってしまっていた。

「で、あの人ったらね…！」

「あー分かる！ちょっとキュンって来るよね～」

「仲がよろしいんですね～」

柊と女子生徒…面倒だから『女子A』…は失礼か。『鹿野さん（仮）』と呼ばせて頂く。

とにかく、男子の目の前で恋バナは止めて欲しい…。よく人前で恋についての話が出来るよな。女子はそんなにタフなのか？

「あんたも”恋バナ”に混ざらない？」

「冗談抜きで頼む。」

「ちぇっ！　つまらな～い」

男子を恋バナに巻き込んでどうするよ。

男子は純情なんだ。そう易々と女子の目の前で話なんか出来るか！

まぁ取りあえずここで少し鹿野さん（仮）の話をさせて頂く。

彼女は二年生で気になる人がいるらしく、相手がかなり曲者であるとのこと。相手は本の虫そのもの、だそうだ。　図書室でバッタリ会った時に一目惚れ。で、話し掛けるチャンスをうかがっていると彼女らの”恋バナ”で判明した。

「でも…彼女とかいたらと思うとさ～はぁ…」

「はいはい元気だして。そういう思い込みが落とし穴だよ？」

「…うん！」

何が落とし穴なのかサッパリわからん。最近の日本語は意味がわからなくなって来たな。

「おい、そろそろ計画立てないか？　恋バナもいいが、まずはそれを成就させるのが先決だと思うが。」

久しぶりに正論を言った気がする。まぁただ単に恋バナなんて聞きたくなかったのが第一の理由だが。

「わかったわ。で、鹿野さん。希望は？」
「え？なんの…」
「デートよ。でぇと！　行ったこと無いの？」
「うん…コレが初めてで…」
「ねぇ松下、オススメは？」
「何故に俺。」
「部長でしょ。」

部長だからってそれは変だろ。こういった類の話は女子専門と相場が決まっている筈だ。まぁそれでも、というなら教えてやろう。

「…自身の経験から言うと…水族館と動物園がベター、更に言うならショッピングだがベストなのはハウス○ンボスだな。」
「経験って…あんたデートしたことあるの？」
「無論無い。　あるわけがない。」
「じゃあなんで？」
「俺の経験ってのは部を立ち上げての相談者のデートスポットだ。
　誤解するな。」

第一俺は女が苦手なのだ。それなのに『デート』という自殺行為に等しいことをせにゃあならん。そんな事をする日には投身自殺を図る。

「どうするの？鹿野さん。」
「う～ん…水族館…かな？で、図書館で本を読み漁るとか…」
どんなデートだよ…
俺の経験でも水族館の次に図書館は聞いた事がない。普通ならショッピングとか…海とか…あ、釣りってのがかつてあったからあながち普通かもしれん。ううむ…

「で、告白は？」
「それもそっちでしてくれるんじゃないんですか？」
なんだその告白代行は。告白は自分自らがやって初めて成り立つものじゃきに。でも最近は”メール告白”とかあるそうだからな…代行ってのもアリか…絶対にナシだな。
「私達は告白まで代行する気はないわ。って、そしたら『恋愛応援部』じゃなくて『恋愛告白部』になっちゃって、ゆくゆくは『恋愛告白部っ！』というような小説タイトルに変更になるわよ。」
む…珍しく柊が正論を。明日は雪か。いや、ウェザー・リポートで出来るけどね。

「最後は自分…わかったわ。」
「その調子よ。頑張れ。」
…女ってのはサッパリわからない生き物だ。　柊は最初は丁寧な口調の筈がドンドンズレて行っているし、鹿野さんはよく喋る生物になっている。　恐ろしい生き物だ。
「…松下、さっきものすごーく失礼な事を考えてない？」
「…ねえよ。」

コイツはエスパーか…

「いつにする？デートの日は」

「う～ん…来週の日曜日ってのは？」

「わかったわ。　今日が火曜日だから…結構あるわね。それまでに計画を立てておくわ。」

「ありがとう。それと…」

「ん？」

「好きな人にツンツンしちゃ駄目だよ？」

「はぁ？」

「うそうそ。じゃ、私は帰るわ。じゃあね～」

そのまま鹿野さんはドアを開けて帰っていった。　ううむ…女子の会話ってのはイマイチ不明瞭だな。やれやれ…って、柊の顔がキレているように見える。キレてますか？

「キレて…ませんよォ！！」

そのまま裏拳を顔面に喰らい長嶺さんに抱きつくようにぶっ飛ばされたとさ。ちなみに長嶺さんに介抱されたらしいがイマイチ記憶に無い。恐るべし、女の底力…

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．？

来訪者…（後書き）

ふーむ…やはりヒロインを作るべきか…曖昧で行くか…独身貴族か…悩む。

しかし、学園ってなかなか人来ないね。
ファンタジーならかなり人来るのにさぁ～

依頼と戦慄と恐怖

淫行を免がれんために、男はおのおの其の妻を持ち、女はおのおの其の夫を有つべし。夫は其の分妻に尽くし、妻もまた夫に尽くすべし
「コリント前書七章二節」より

―土曜日―

土曜日、本日は晴れなり。
風も吹かず非常に過ごしやすい日なり。そんな日、ある部活が第二文化室に籠もっていた。

「……」

その中は静まり返って、ある種の暇オーラを発散していた。
その部屋を訪れる者はあまりいない。しかし、今日は違っていた。

「―で、何のようですか？」
「あ～鹿野さん、明日についてなんだが…」

今日は依頼者が来ている…いや、呼び出したという方が正しいか。

「明日のプランはこの紙に書いてある。その通りに動いて欲しい。」

ここ、第二文化室は恋愛応援部の部室として今現在機能しており、そこには暇オーラを絶賛排出中の部長、松下がそこを占拠している。

「…わかったわ。ここに書いてある通りに動けばいいのね。」
「言っとくが、俺達はセッティングするだけだ。デート中の話とか

告白とかムード作りは一切関与しないことを警告しておく。」
恋愛応援部…といえばあまり想像できはしないだろう。簡潔に言えばその場所の選定及びセッティング、イベント情報の取得あたりだ。
「…最初は公園で待ち合わせ、次に電車で移動。次は水族館…ね。」
「文句あるか？」
「なし」
「グッド！」
この部は現部長の兄が多数の同志と共に立ち上げた部活動であり、学校内外においても意外な程に名前が知られている。それは”イケメンがやたら集約している部”という事に由来する。結果として有名になったりした。
「それで君にコイツをつけて貰いたい。」
で、現部長松下和哉は今現在依頼者にある物を見せている訳である。
「ナニコレ？」
「これは簡潔に言えばナノマシン。この注射をすれば五時間程度ならこちらの指示がわかる。感覚でな。」
松下が見せたのは彼の親が勧めているＳＰＷ財団の『ＳＯＰシステム』という最新鋭の技術が盛り込まれたナノマシンだ。これは一時的ではあるが必要な情報を共有できる技術で、簡単に言えばケータイが無くても指示が出来るのだ。
「変なのは嫌よ。」
「…最初会った時から口調が変わってない？」

鹿野さんは若干顔をしかませたがそれをポケットに突っ込んだ。

「それを当日に自分の首に刺せばいい。いいな？」

「わかった。」

「あと…コイツをやろう。」

「なに？

「水族館特別チケット。　コイツを持って行けば面白い事が起こる…かも」

そのチケットは『カップル専用特別体験チケット』と書かれた水族館の特別優待券だった。

ここらへんの水族館はカップルのデートスポットとして有名らしく、それにつけ込んだ水族館側の配慮というか戦略らしい。

ちなみにコレは予約制でなかなか手に入りにくく、レアである。

しかし、松下はＳＰＷ財団日本支部に直接問い合わせてこのチケットを入手した。　その時電話に出た人がやたら『ついに貴方にも春が…』なんて言っていたのでかなり焦ったのはいい思い出だ。

「ふーん。」

「ところで、夢中の彼は呼び出したのか？」

「バッチリ。典型的だけどちゃんと靴箱に入れて予約して来たわ。」

どうもこの娘はやりにくい。女子と男子の対応の差がありすぎるのだ。話しかけにくいと言ったらありゃしない。

「ま、頑張れ。」

「わかってるわ。恋愛に疎い貴方もね。」

「失礼な事を言ってくれるじゃないか…」

頭に少しカチンと来たがそこは理性で跳ね返した。　第一恋愛なぞ

していたら俺は自殺するぜ。

「はいはい、貴方の戯れ言は聞き飽きたわ。帰る。」

そのまま鹿野はドアを開けて帰っていった。　ふむ、やりにくい奴だ。

「伊藤よ」

「なんだ？　頭にカチンと来ている松下」

伊藤は絶賛ゲーム中だ。イヤホンを装着しながら。そんなイケメン伊藤の堕落さを見て、松下の”決定的な何か”が切れた。

「少しは助け舟を出しやがれ！！　ウェザー・リポートッ！！」

「ちょ、止め…」

「ええいここに純粋酸素１００パーセントを充満させたろか！？」

「だったらテメーも自滅するだろッ！！」

「構わん！　シネィィィ！！」

『何やってんの…伊藤君に向かって…』

「……ッ！！」

松下は戦慄した。

後ろに絶対的な存在があると、絶対的な恐怖が存在すると、肌で感じ取っていた。

「私の…伊藤君に…”何”をしようとしたの…？」

「え…いや…別に」

「へぇ…嘘つくんだ～…あはは！『本当になにも…？』」

「もちろんでございますよ～ヒイラギ様。伊藤に危害を加えても私には何も”とく”はありませんよ～」

松下は伊藤にアイコンタクトを送った。しかし…その反応は次の通りだった。

（おい伊藤！！　助けてくれ！）

（すまない。俺には…出来ないッ！！）

それを最後にして伊藤は目を背けてしまった。酷い…訴えてやる！！

「そう、確かに貴方にとっての”とく”は無いわね。」

ええ。ありませんとも。

「だけど…これは免罪は出来ないってこと…お姉さんが教えてあ・げ・る」

柊が耳元で甘く呟く。麗しいその唇を耳に極限まで近づけるから耳にダイレクトに息が当たるのでくすぐったい…が、松下にはそんな事を考える余裕は一切無かった。むしろ命の危険を感じていた。

（なんだ…この俺が…恐怖を感じているだと？バカなッ！！）

「わ～るい子はお・し・お・きが必要ね…ふふっ！　悪いようにはしないわよ？」

甘い言葉の中の、殺意。恐怖。もはや打つ手ナシ。乙。

しかし！！我が主イエス・キリストは松下に救いの手を差し伸べた！！

（…ん？　この風…）

窓から風が入ってきていた。そう、あたかもそれが救いの道と言わ

んばかりの存在感を、松下は窓に対して感じていた。

「ふ…フハハハハ！」

「なにを笑っているのかしら？　あなたの審判の時（ジャッジメント・ザ・ワールド）は迫っているのよ？」

「ふん！　貴様なぞにやられる俺ではないわ！」

「あら、そう？　もうすぐで伊藤親衛隊が駆けつけてくる。　貴方はキリストのように十字架にかけられたりするかも知れないわ。今のうちに命乞いと伊藤君への謝罪をしたらどう？」

「ふん、お断りだな。伊藤如きに謝る必要はない。」

そのとき、柊の後ろに『奇妙な影』が出現した。

（まさか…コイツ・・・）

「…気が変わったわ。今ここでッ！　貴方をッ！　殺すッ！！」

柊の目が怪しく光り、柊の後ろにある『奇妙な影』が怪しく蠢いた。

「……ッ！！」

柊にはそれが見えたのだろう、視線の先には『奇妙な影』があった。

「これは…ッ！」

柊は少しびびったが―いや、柊は瞬時にそれは自分の半身ということを学習したようだ。何故なら柊が影に構わずに松下に攻撃しようとした時、先に影が動いていた。

「はあああああ！！」

一発、二発と影が松下をラッシュしていく。

松下はそれにより窓の方にぶっ飛ばされていった。

「勝った…！」

「甘いな！！　貴様は俺との知恵比べに負けたのだ！見覚えはないのか？　この俺がぶっ飛ばされてゆく先にあるものがッ！！」

「……！！」

血を吐きながら松下は窓を突き破って外にぶっ飛ばされてゆく。

「そうだ…窓から脱出する為の…逃走経路だッ！！　ウェザー・リポートッ！！」

松下は瞬時にウェザー・リポートを発動、エアバックを作り出して地面に着地した。それを見た柊は正直驚きを隠せなかった。

「あれは…ここは三階よ！？何故生きてるの？　そしてこれは何！？」

「そいつは”スタンド”と呼ばれるモノだよ。」

一部始終を全て見ていた伊藤はやたら面倒くさかったが、説明しないと暴走してしまいそうな柊をみて口出しした。　ああ、面倒くさい…

「伊藤！？　コレは…？」

「君の精神エネルギーだよ。そばに立つ、スタンド・バイ・ミーから取った造語だ。」

柊はその自分の半身をじっくり眺めた。
大きさは柊より小さく、黒と思っていた所は髪と言うことが眺めて初めて理解した。性別は女らしく、胸はない。
だが、スウ…と消えてしまった。

「それと、スタンドは同じスタンド使いしか視認することが出来ない。」

「じゃあ、貴方も持っているの？　貴方もスタンド使い？」

「いや、何故かスタンドは持ってないんだ。　ただスタンドが見える。」

「スタンドが見える…じゃあ他にいるの？」
「ああ、松下だ。」
「嘘ッ！！」

柊には今世紀最大のジョークだと思いたい、そう思った。

（冗談じゃないわよ！　なんでアイツと…）

「ま、そう言うわけで、じゃ」
伊藤はまさに脱兎の勢いでその場から逃走した。伊藤親衛隊も来るらしいので早めに逃げ出した方がいいという判断からだった。

―夜―

『壊れるほど愛しても、三分の一も伝わらない』

夜、一人男飯を作っている松下の携帯が鳴り響いた。今回は名曲に設定してある。

「もしもし、」

「あ、松下？　柊だけど…」

なんだ、柊か。昼の続きでもやるのか？

「私ね…スタンド使いになっちゃったみたいなの…」

「なんだその自分が生理になって親に報告する娘のようなたどたどしい言葉使いは…」

「……死ね」

「すいません。」

とりあえずは謝っておく。　逆ギレされる前に謝ったほうがこういった人間には一番だ。

「はぁ…で、要件を言え」

これ以上口論するのも面倒なので、要件を聞いてみた。

「スタンド使いについて」

「スタンドね…ヤダ」

「はあああああ！？　死ねッ！！　死ねッ！！」

電話の耳を当てている場所がジンジンと響く。　柊、お前も女なら大きな声と暴言を吐くな。　死ねはないだろ…

「明日、行動中に殺してあげる。」

「やめろ。リアルに聞こえる」
「あら、私はいつだって本気よ？」

その開き直った感がさらに怖い。
マジで明日死ぬかもしれん。あなや。

「…ったく、スタンドってのは…―中略―だ。わかってくれたか？」
「伊藤と同じ説明。」
「じゃかしい！　切るぞ！」

ぷー…ぷー…ぷー…

向こうから切られた。
やれやれ、まさか柊までも…。やはり第二文化室は悪魔の手のひらかも知れない。
長嶺さんもスタンド使いになるかもしれない。これから鬱になる…！と、今日1日を振り返った松下の感想だった。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．！

依頼と戦慄と恐怖（後書き）

しまった…柊にスタンド使わせてしまった…
モチーフ？いいえ、完全なオリスタです。
ネタとしてはＤＩＯがジョセフの血をすう所ですか。
柊のスタンド名…どうしよ？
急募しましょうか。スタンド名と能力。
いなかったらスタンド名は『審判の時』、能力…『確率を操作する』
ぐらいかな？

いや、スタンド名は『ＳＡＶＥ　ＭＥ』か…

反省：今回はどうも読みにくい。

朝に吹く一陣の風

彼女が欲しいならとにかく動け。
そうしないと、いつまでも女は振り向いてはくれんぞ。

ｂｙ作者の友

―公園―

本日は快晴。雲すらない真っ青な春空である。
そして、その春空陽気のなか、とある公園に集まる少年少女がいた。

「これで全員か？」
「ええ。鹿野さんもあわせてメンバー全員が集合しています。」

松下の問いに前田は答える。
そう、今日は依頼者の鹿野さんの恋愛を成就させる日。任務決行である。
ここに集まったのは全員で六人。
松下は上は普通のシャツに羽織もの、ズボンは第六部承〇郎の奴。
伊藤と前田は普通のラフな格好で。
柊はオレンジスカートで上は白の服。
長嶺もピンクのスカートで薄着。
鹿野は…まぁ、本番用っ！と言わんばかりの気合いの入れ方で黒主体のコーディネートだがそれが艶やかさを醸し出している。そしておっぱいを上げている。おっぱいを。

「では、鹿野さん。昨日渡した注射器を使ってくれ。」

「え…ええ。わかった…」

鹿野はＳＯＰシステムナノマシンの注射器をポケットから取り出す。その取り出す時の顔はあまり芳しくなかった。

「…どうした？」

「あのさ…私、注射器駄目なんだけど…」

「……？」

「だから、注射は苦手なのっ！」

「…あ、そうなのか。まぁどうでもいい。速く。」

松下は鬼畜だった。

「ちょっと、嫌がってるじゃない！　だからモテないのよ？」

「構わん。」

「か…構わんって…」

柊はその不粋さに頭が痛くなってきた。どうして松下はこんなにおかしいのかと常々思う。

「やれやれ…俺がやってやる。腕貸せ。」

「えっ！？　ちょっらめぇ！」

松下は強引に鹿野の腕を引っ張り、そのまま注射した。　少し可哀想だとは思うが別に同情はしない。　松下はまさに鬼畜だった。

「ぐすん…」

「泣くな。」

「うう…」

「やれやれ…扱いにくいわ。」

正直、どうも女子ってのは好きになれない。　泣けば許されるっていう女の涙は武器理論が松下は嫌いだった。それで男は何人騙されたか計り知れない。

「じゃ、そろそろ相手が来る。我々は遠方で君を援護するからな。そこんとこよろしく。」

時刻は午前9時。そろそろ来るであろう時間帯だ。
松下らは公園を少し離れた場所で彼女らを見守ることにした。

―公園より少し離れた場所―

「―という訳で柊、あんたも注射してくれ。」

松下が持っていたのは注射器一つ。
松下はそれを柊に注射するように促す。

「…私が？」
「あたりまえだ。　でないと意味がない。」
「俺らは？」

「ねぇよ。そんなに準備出来ないんだ。今あるのは鹿野、俺、柊の分しかない。」

伊藤はややどんよりとしょぼくれてしまったが、それを前田が優しく励ます。

「伊藤君…元気を出して下さい。君は十分役に立ちますから…」
「前田…お前ってやつは…！」

「伊藤君…」
「前田…」
「オイコラ、百合…じゃない、男色に走るんじゃない。」
この情景を第三者の立場から見ると、今の伊藤と前田の関係を確実に”男色(なんしょく)”と見るだろう。確実に引く。
いや、ＢＬが好きな人が見れば興味を引くかな？
「伊藤君、貴方は男に興味があるの！？」
「前田君…そんな…」
ほら、傷ついている乙女が二人。
「やれやれ…お芝居は終わりにして柊、さっさと注射しな。」
「む～あんたがやりなさいよ～」
可愛く…第三者から見れば可愛くみえる仕草をしながら松下に注射器を押し付けてきた。
ちなみにこの注射器は既に消毒済み。
「腕貸せ。」
強引に柊の腕を掴み、袖を巻くしあげる。　そして注射するところにアルコールを塗り、すっと注射した。
「……ッ！」
少し痛そうな顔をしたが、そんなことはお構いなしという風に松下は注射を続け、終わった。
「終わりだ。」

少し柊が怒ったようだが構わん。
次は柊と鹿野に接続する必要がある。こんな悠長にしていられない。

（あ～柊）
（えっ！？　）

松下は軽く脳内で柊に対してメッセージを送ってみた。すると柊のびびったマヌケな声が聞こえてきた。頭に。

（やれやれ…接続は出来たな。）
（どうなってるのよこれは？）
（ＳＯＰシステムの相互認識システム…だっけ？まぁそんなのだ。）
（あ～口で喋らなくてもテレパシーでやりとりするアレ？）
（そんなのだ。コレで依頼者の誘導をするからな。じゃ、次は鹿野に接続…っと）

柊の精神への接続は成功して相互のリンクに対応した。実を言うとあまり柊とは喋りたくはないのだが…依頼者が女性なのでオペレーターが女性だったら何かとやりやすいという理由から柊を選定した。

（お～い、鹿野ぉ～）
（ひゃッ！？　な…なに！？ユーレイ？）

おお、見事にパニクっているじゃないか…。どれ、少し意地悪してみるか。

（そうだ…私は悪魔だ…）
（ひゃッ！？　やっぱりそうなのね！？）
（お前と彼氏とのやりとりをジャマしてやるわ…ファファファ！！）

ううむ…エクス〇スの笑い声をしてみたのだが…なかなか役にはまってる―じゃない、こんなことをしている場合じゃねぇ！

（というのは嘘だ。おれだよ俺。）
（ッ！？　悪魔からのオレオレ詐欺！）
（違うって。俺だ、松下だ。）
（そして、私が柊よ！）

ええいやかましい娘がリンクして来やがったな…

（松下と柊ちゃん…ああ、恋愛応援部の！）
（そうだ。コイツで我々恋愛応援部はあんたをサポートする。）
（へ～！なかなかやるじゃん。）

むぅ、鹿野の口調が最初会った時より暴走し始めてきたな。コイツは警戒すべきだな。

（あ、ちなみにあんたと意中の人とのイチャイチャラブラブな会話は全て聞かせて貰うからな。）
（はあああああ！？）

うぉッ！！頭に響くぅ～
もうちょっと音量を下げてもらいたいものだ。

（仕方ないだろ！？　そうしないとこれからのプランが分からなくなる。）
（む―！）
（やれやれ…諦めなさい。）
（はぁ…仕方ないわ。でもね、変な事を言ってきたらアンタ死刑だからね！？）

全く…最近の若者は死ねだの死刑だから！とかよく言うわい。ゆとり教育の弊害が日本語の乱れと直結しているのがよく分かるわ。

（テメーもなッ！！）

すかさず柊による蹴りを喰らってしまった。　うん、今日は黒だったか…

「な…何ですって！？　オラァ！」

「ぐぉおおおお！」

トドメにもう一撃頂いたあとでノックダウンした。ちなみに完璧に黒だった。

サヴェジ・ガーデン作戦

―公園―

「来たぜ～あれか」

伊藤が指差した先に、男がいた。よくよく目を凝らすとそいつに見覚えがあった。

「…『北尾（きたお）　祐一（ゆういち）』か？　そうか。本が好きだからな」

鹿野はその北尾のそばに近付いていっている。なるほど、正確のようだ。

一応容姿は…ランクＢ＋。ちなみに伊藤、前田がランクＳで最高ランク、松下がＢ＋。

これは学内容姿アンケートという偏見満載のアンケートで女子が投票もしくは評価をつけたものの結果による。

実際、この評価はかなり正しいようであり、告白数がＢ～ＡとＡ～Ｓの差が大きい。約二倍違うそうだ。

「ふ～ん…彼にも春が…」

「アンタには来ないでしょうけどね」

「だろうなぁ。見た目と性格が破綻しているからな」

松下は完璧に自分に対しての自信を喪失している。そこも女子離れに拍車をかけている、という。

（鹿野…北尾が好きなのか？）

（…ッ！！　うん…）

（そうか。頑張れよっ）

鹿野に確認を取るついでにエールを送っておいた。頑張れよ鹿野！お前には我々恋愛応援部がついているからな！！

いつだってお前の味方だぜ！

『待った？』

「ううん、今来たところ」

『そっか…』

（ラブコメの典型的な展開だな）

（…ええ、そうね）

目の辺りでラブラブな所を全員双眼鏡で覗く。第三者から見ればかなり異質な光景であろうが仕方ない。『で、今日はどこに…？』

「あ、うん…電車で水族館に行こうと思ってたの」

『水族館かぁ…懐かしいなあ。小学校以来だよ』

「じゃ、いこっ！」

むぅ、たどたどしさの中に初々しさが残る初恋の風景、て感じがする。松下はすかさず次の指示を飛ばす。

（よし、よくやった。次は電車に乗るんだが１０分後に発車する。駅は歩いて三分ぐらいだから…北尾の話を聞いてやれ）

（わかったわ）

二人は公園を出て道路を渡り、駅に向かう。

『で、ミトコンドリア・イヴっていう説が…』

「うん、それで？」

応援部は見つからない距離で二人を尾行する。警察に見つかったら職務質問されるぐらいだ。
「面白いのか？ミトコンドリア・イヴ」
「さぁ…ミトコンドリア・イヴ…？」
二人の会話に頭を撚りつつも難なく尾行した。

―電車内―

鹿野を追跡して電車に乗り込んだ恋愛応援部。これから何をするか相談中である。

「えっと、これから水族館だな。どうするんだ？」

伊藤は首を傾げる。そういやコイツには教えてなかったな。ま、一応教えておくか。

「予定なら、水族館でイベントが発生する予定…なんだが」
「なんか問題か？」
「無いんだけどさぁ…」
「はっきりしませんね。貴方程の奇人が危惧することがあるのですね」
「かなり失礼な事を言われたような気がするが…」
「いえ、誉めただけですよ」
うーむ…誉めていたのか？　些か前田の言論は掴みにくい。たまに毒を吐く生物だ。
「ま、一応危惧していることは…柊のスタンドだ」

鹿野のデート関係では全くないのだが、さっきから気になって仕方ないのだ。
　柊のスタンド能力が、一体どんなのか詳しくは知らない。
「スタンド能力かぁ…いいなぁ」
「松下さん、柊さんのスタンドは見たことはあるんですよね？」
そういえば一度しか見たことがなかった。　しかも一目。　ブン殴られながらのチラ見だった。
「それじゃあ情報が少なすぎます」
分かっているさ。こっちはそのことで頭が痛いんだ。やれやれ…
　しかし、その井戸端会議は急遽終了することになる。電車が目的地に着いたようだった。
会議は後で柊を入れたのちでしようという事になり急いで駅を降りる。
「遅い！」
柊が何故か怒っていた。まぁ待たされたというのが原因だろうが、同じ電車に乗っていて降りるのが何秒か速かったからって怒ることはないだろうに。
「はいはい、鹿野は？」
「先に行ったわよ。あんた達を待っていたんだから…」
「やれやれ…先に行けばいいものを…」
その言葉にカチンと来たのだろう、柊はつい声を荒げてしまう。

「はあああ！？　せっかく待ってやってたのにその言い草は無いんじゃないの！？」
「…うるさい」
「アンタなんか死ねばいいのに！消えろ！」
「…死ぬ時には死ぬし、消える時には消える」

やれやれ、最近の女子高生は気性が荒いというか何というか。ま、とにかく俺個人としては早く鹿野を追いかけるべきじゃないのか？と思う。

「……ッ！！　追うわよ！」

やれやれ、柊を入れるべきじゃなかったか。今頃後悔しても遅いか…

―水族館―

『はい、ありがとうございます』

恋愛応援部は難なく鹿野達を見つけて水族館に入館した。そして入館料は自腹ではなく部費から払った。

「暗いな…」
「足元注意しろよ。長嶺、特にあんたはな」
「ふぇ！　ふぁあ～」

さっきから見ていて気付いたのだが、長嶺はかなりおっちょこちょいの可能性がある。
駅からここまで長嶺の後ろを歩いて来たんだが、どうも転びやす

い…というか何も無いところで足を引っかけるなよ。

「長嶺さん…大丈夫ですか？　」

「あ、前田くん…。うん、大丈夫！」

それを見かねたのか前田が長嶺の横に付く。それに反応したのだろう、長嶺の頬が少し赤くなったように見えた。

「……ッ！」

柊は長嶺の行動を見て学習したのだろうか、わざわざご丁寧に伊藤に向かって転びかける。

肝心の伊藤は特殊なガラスで出来た壁の向こうにいる魚達を見ていて、柊が倒れてくるのに気が付かなかった。

そして、「のあ！？」と伊藤は呻きながら倒れ、言ってみれば柊が伊藤を押し倒すような体制になっていた。

それが柊に火をつけたようだ。そのまま柊は伊藤に対してマウント・ポジションを確保し、完璧にロックした。

「……へ？」

伊藤は何が起こったかさっぱり理解出来ていないようだ。確かにその気持ちは良く分かる。なにせいきなりマウント・ポジションを取られてるんだからなぁ。

すると、柊の顔が急に伊藤の顔に近づいてきた。柊はなにか覚悟を決めたような顔つきで瞳を閉じ、その淡い桃色の唇を伊藤のものにくっつけようとした。

そしてその瞬間―

「ま…松下！ヘルプ！」
さすがに貞操の危機を感じた伊藤はジタバタ暴れ始めた。
「あ、もう、ジッとして！セーブ・ミー！」
「何！　スタンドだと！？」
柊は自分の半身と言うべきスタンドを出し、伊藤を押さえ込んだ。
もう伊藤は動けない。
「ジッとして…」
「ちょっ、離してくれぇ」
柊はもはや理性の残っていない、ただのケモノの目をしている。たしか猛禽類だかそんな感じの。それの餌食が、伊藤。
「おわっ！」
柊は無理やら伊藤の顔を手で抑えて固定し、動かないようにした。
どうする伊藤。絶体絶命の貞操のピンチだ！
そしてそのまま、顔を近付けキスを―
「貴様ら、そこまでだ。見ていられんぞ…」
キスをすることは叶わなかった。すんでのところで松下が柊の襟を引っ張ったおかげで伊藤は貞操の危機、ファーストキスを死守することに成功したのである。
「何するのよ！あと少しで…」
「今は任務中だって！　忘れたのかよ…」
「わ、忘れちゃいないわよ。ただチャンスをモノにしたかったの！」

どんなケモノだ、と最後に付け加えて伊藤を立たせる。すっかり腰を抜かしているみたいだ。それだけ怖かったんだな…

「あとな、柊」

「なによ」

柊の中で松下株が絶賛下落中のなかで松下は言った。

「スタンドについて、あとで話し合うぞ。今のお前の能力がわからない限り、容易にスタンドを使わせる訳にはいかないからな」

「あーも、分かったからあっち行けば？」

柊は何故松下が女子から汚物扱いされているか、ようやく理解できたのだった…

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．！

サヴェジ・ガーデン作戦（後書き）

ようこそ…男の世界へ…

サヴェジ・ガーデン作戦その2

いかない者も、いつかは死ぬ。
いかなる者も、いつかは恋をする。
いかなる者も、いつかは泣く。
いかなる者も、いつかは笑う。

by　作者

―水族館―

「ちぃ…対象をロストしちまった…」
「誰のせいかしらね？」
「お前らだろうがッ！！」

いささか困ったことになってしまった。柊が伊藤を襲っている間にあの二人は先に進んでしまったようだ。しかも前田と長嶺までも消えてしまった。ゆゆしき事態だ。

「困った…場所がわからん」
「ＳＯＰは？」
「無駄だ。コイツには居場所を特定する事は出来ない。こちらから鹿野に聞くという手もあるが…」
「じゃあやればいいじゃない」
「出来ないんだ。　そうなったら『恋愛応援部』の信頼度が下がる」

今までこの部が活躍出来たのは、完璧な監視と完璧な補佐による実績からによる。もし依頼者自身に聞いてしまったりしたら、それ

こそ評価がガタ落ちすること請け負いだ。それは避けたい。

「あっと…前田に聞いてみるか」

前田なら律儀に尾行している筈だ。なんと言っても信頼度ＮＯ・１のヤツだからな。

「…あ、前田か？」

『はい、そうですよ。松下さん』

む、繋がったか。やれやれなんとか鹿野の捜索の目処は立ちそうだ。

「今どこにいるんだ？　今見失っていてな」

『ああ、鹿野の居場所ですか？　なら、クラゲの展示場所にいます。なんだかいいムードを醸し出していますよ』

「グラッツェ！　また会おう」

『はい』

松下は手持ちの館内案内図で急いでクラゲの展示場所を探す。む、結構離れてるじゃないか。

「ま、すぐ行けば…なにやってんだァー！」

ふと、地図から目を離して隣を見ると、柊が再びマウント・ポジションを奪っていた。

伊藤は既に泣きそうだ。そりゃそうだろう。貞操の危機だから。

カチンと来た松下は、すぐさま二人を引き剥がし、二人の首根っこを掴んでズリズリ引きずっていった。

―クラゲ―

クラゲとは、漢字で水母と書くそうだ。　しかも体を構成しているのはゼラチン質でふにふに。柔らかい。

クラゲはいくつかの種類に分けられるが、正直あまり分けなくてもいいと思う。だって全部同じじゃん。刺すし、透明だし。

「ぶっちゃけ、クラゲって旨いのか？」

「知らんね～。俺はマズいぜ」

「たしか、輪切りにして乾燥させた後、ポン酢か和え物にしたら美味しいらしいですよ」

俺達はなんとか前田達と合流し、鹿野さんらを発見できた。

そのとき、クラゲを眺めている北尾、鹿野さんを見ていて、なかなかいい雰囲気になっている。いい兆候じゃないかしら。

「でも、何故にクラゲ？」

さっきから二人はなかなかクラゲの水槽から動かない。そこで、二人の会話をＳＯＰで傍受してみると、北尾がクラゲ好きということらしい。

「クラゲ…」

クラゲは基本的にプランクトンとして生活しているらしい。だが、クラゲの持つ毒で動物性の餌を取ることもある、意外に危険な生き物だ。

そんなクラゲに惹かれる輩も多いそうだが。

「ん？　クラゲには飽きたのか…」

二人はなかなかの雰囲気を醸しながらクラゲコーナーを退出した。

「追うぞ。」

「え…クラゲを」

「知らんね。行くぞ！」

いつの間にか情が移ったのか、大きいガラスにへばり付く伊藤。お前はタコか。

「あん…私達はここで愛を育んで行くから先に行ってて」

柊は猛禽類のような、イーグルが餌を見つけ出したような鋭い目になり、伊藤を襲う。伊藤はガラスに見入っていたせいか、柊の接近に気付かずに…

「セーブ・ミー！」

柊は自身のスタンドを出し、伊藤を捕縛、マウントを取り伊藤を啄む。

「・・・勝手にしてろよ。もう」

伊藤を助けるのに飽きた松下だった。

―水族館プール―

この水族館にはプールがある。

ま、プールとは言っても人間が泳ぐためのプールではない。水性生物の為のプールだ。

「イルカショー？」

柊の餌になることをギリギリでかわした伊藤は松下に問う。松下はさもＥｘａｃｔｌｙと言わんばかりと首を縦に振った。

「ここで、あるイベントが発生する予定だ。ほら、チケットの特典」

「ああ、なんか言ってましたね。で、なにをするんですか？」

「イルカの餌やり・・・じゃないか？」

たしか、チケットの特典はそういうのじゃなかったっけ。カップル専用特別体験チケットは。

「おい、イルカショーが始まるぞ～」

ま、体験内容がなんであれカップル向けのアトラクションなら安心だな。別にイルカの背中に乗るとか、そういうのはないだろうし。

とにかく、イルカショーは始まったのである。

―１０分後―

「…水がかかるなんて聞いてないぞ」

「私も」

開演して１０分後。

プールに近かったせいもあるだろうが、見事に水が掛かってしまった。

別に俺達は悪くない。こっちにきていきなり水をかけてくるイルカが悪いんだ。

「イルカ…」

イルカとグジラの違いは殆どないそうだ。　ただ唯一のグジラとの違いは大きさだけだそうな。豆知識。

「松下さん、次は何があるんですか？」

長嶺は見事な『朝比奈ボイス』（ＣＶ：後藤〇子さん）でこちらを癒やす。うん、素晴らしい。

「えっと…特典のなんかの体験だな」

「なにするんでしょうか…？」

長嶺さんは首を傾げてはいるが、傾げる先に前田がいる。つまり、無意識ではあろうが前田に近付こうとしている訳だ。健気な人だ。

『ヘイ！レディースエンドジェントルマンボーイアンドガールズ！皆さんこんにちは。　この水族館の総合責任者です！』

「なんだ？　何が始まるんだ？」

いきなり総合責任者を名乗るおっさんが出て来た。スキンヘッドで光って水着を着用している。

にしても何故に！？

『今回、カップル専用特別体験チケットを使用されたお客様がこちらにおられまして、そのイベントの実行をします！！』

別にいいんだが、スキンヘッドにピチピチの水着は止めて欲しい

ものだ。体のムキムキ度が良く分かって、少し…

『では、ｉ市からお越しの…鹿野さん、北尾さん！こちらへ！』

「ちょっと…なにするのかしら…？」

「知らね」

「知っておきなさいよ。全く、使えないわね」

柊は松下に愛想を尽かしたらしく、伊藤の方へ移動。長嶺は前田と見ているので、必然的に一人ぼっちになった。

別にいいんだが、なんか寂しいものだ。

『はい、ではこれから特別体験をして頂きます！！　お二人には…！』

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

サヴェジ・ガーデン作戦その２（後書き）

３月１３日。明日は誕生日。
祝って貰えなさそうだ。

今回も読みにくくてごめんなさい。
あと、ＳＢＲの２０巻の帯の荒木先生が更に若返っている気が…

イベントの終焉と異常な寒気

春先にイチャイチャしている男女を見かけたら、絶対に近付くな。そいつらはモテない男女の敵、リア充なのだから…

by作者

『お二人には…イルカと触れ合う事が出来ます！！』

スキンヘッドの頭が光っているおっさんは唐突にそう言い出した。

『これは、一般の方にはまず体験する事が出来ない、貴重なイベントです。　ここで一緒にお二人の愛を育んで貰おうと、そう考えているわけです。　ささ、お二方はあちらでイベントの説明を致しますので！』

二人は壇上に上がったはいいものの、やや状況が理解出来ていないようで見るからにアタフタ焦っているのがわかった。そこで、柊はＳＯＰシステムを使って鹿野とコンタクトを取る。

（鹿野さん…聞こえる？）

（柊さん！？　良かった…私達どうすればいいんですか！？　よく分からなくて…）

（大丈夫よ。そのイベントに参加しちゃいなさい！）

（いいんですか？）

（もちろん！　さ、早く北尾くんを引っ張って行きなさい）

（分かりました…。頑張ります！）

鹿野はそれなら、と北尾の腕に自身の腕を絡ませ、係員が誘導するほうに消え去った。

『じゃあ…お二人が着替えるまで私のお話を聞いてよ～ん！』

は？　と、此処にいる全員が一斉に思った。なぜなら、さっきのスキンヘッドでピチピチの水着（白と水色のストライプ）のおっさんがいきなり…オネエ系の喋り口調に変化したのだ！　強いて例えるならイッコーだ！

『最近ねぇ～肌荒れが凄いの。あ、髪はもう諦めてるから良いけど、今は肌。　女は肌が命なの。まぁ私は男だけどねぇ～』

頬に手を当てながらの雑談。

松下は『無駄無駄ァ！そのテンション無駄ァ！』なんて言っていたが、まさにその通りだと柊は感じた。

『でね、ここのペンギンちゃん達ねぇ、歩き方がよちよち歩きでとっても可愛いの～。　で、そのペンギンの赤ちゃんもとっても可愛いのよぉ～。もう、抱き締めたいぐらい！』

だが、奇妙なことに松下の無駄無駄ァ！という声はピタリと止んだ。

「伊藤…」

「なんだ、少年よ」

松下はなにかしらの恐怖を感じているのか、伊藤の見間違いでなければ彼の額に冷や汗らしきものがみえた。

「ちょっと…トイレに…い…く」

「おい、松下？　具合悪いのか？　顔色悪いぞ…」

「いや、顔つきは元から気持ち悪いから…」

「いや、意味をはき違えるなよ…」

こりゃかなりの重傷だな、と伊藤は結論付け、松下の肩を取ろうとしたその時！

「……ッ！！」

なぜ松下が恐怖しているのか理解した。

松下の目線の先には…スキンヘッドオネエ系のおっさんがこちらをチラッチラッと見ていた。　いや、チラチラレベルじゃない。隙あらば凝視している！！。

「あ…あれは…」

『あ、そうそう。私ねぇ…男の子が好物なの。そう、ピチピチの高二ぐらいの年頃が最高なのよ…』

「伊藤・・・逃げるぞ」

伊藤もその時鋭い感覚が背中を駆け抜けた。嫌な予感。鋭く突き刺さる男色の目線…

ここで、松下と伊藤は感じた

『貞操の危機ッ！！』

伊藤と松下は一目散に駆け出し…トイレへ逃げ出した。

―数分後―

「あのスキンヘッドオネエ系のおっさんはどうした？」

約七分後、トイレに避難していた恋愛応援部の部長と部員の二人は、あのむさ苦しいおっさんを警戒していた。他の観客の喋り声に紛れ込むように、松下はもといた自分の席に、伊藤もその隣に座る。

「あのオネエ系の人は仕事とかなんとかで戻ったわ。　…まぁ、あなた達を探しに行ったのかも知れないけど」

「嘘だろ柊！？」

「ええ、嘘…かもしれないわね」

ふふん、と二人をバカにするように横目で見やりつつ、ついつい伊藤に目が行ってしまう。

（やっぱり…私って恋、してるのかな…？）

「柊～」

（ついつい見ちゃうし…やっぱり私、伊藤君のことを…）

「柊ってば！」

「…え？」

柊は少し妄想というか思春期的な恋愛の事を考えていたため、せっかくの愛しの伊藤君の呼び掛けに反応出来なかった。

「え？　じゃないぜ～。鹿野さんはどうなったって聞こうと思った

のに～」
「あ、ああごめんなさい。　鹿野はまだ更衣室に…って、噂をすれば…ね」

ふと二人はプールの向こうに設置されたオネエ系のおっさんが乗っていたステージに噂をすれば、の通りに二人はいた。
むぅ、改めて鹿野さんの体付きを見てみると、服よく似合っている。学園１５大美少女には入ってはいないがなかなかのスレンダーボディと胸…結構あるな。

『はい、お二方に説明するのも終わったようなので、只今からイベントを開催致しま～っす！』
場内に爽やかなイケメンの声が響きわたる。君、もっといい就職先はあったろうに、何故男色な経営者のいるこの水族館を選んだんだ？

『最初はイルカさんにエサを与えてもらいま～っす！　この魚を、イルカさんのお口に入れて下さいね！』

イケメンは鹿野にイルカのエサとなる魚を入れたバケツを渡した。
「って、どうしよーか…北尾くん」
「あ、うん。そうだね…この魚をイルカの口に入れるんだよね」
そう言うと、北尾は鹿野の持っているバケツを「僕が持つよ」と言って彼女からバケツを受け取り、プールサイドに立った。
「この魚を…っと」
水面には既にイルカは集まっている。

中には水面に顔を出して今か今かと口を開けて待っている者もいる。
北尾はバケツの中の魚を摘み、その中の一頭に与えた。

「へぇ～北尾君、上手いんだね～」
「それほどでも」
「私にも出来るかな…」
「出来るよ。ほら」

北尾は鹿野の手に魚の尻尾を持たせ、自身はそれを見ている。
鹿野は受け取った魚を注意しながらもプールサイドにいるイルカの中の一頭に向かって投げた。　目標のイルカは器用にそれをキャッチして食す。

「出来たじゃん。上手いんだね」
「やった～嬉しい…」
「じゃあどんどん行こうか」

それを合図に魚をイルカに与えていく。二人の距離は確実に近付いていた。
一応言っておくが、この会場には既に松下らと鹿野達しかいない。理由はこの二人のイチャイチャぶりが昔を思い出して恥ずかしいとか、そんなことらしい。

「…見ているこっちが恥ずかしくなってくるのは何故？」

松下はそれらの人々の代弁として口にした。

「……しらね」

伊藤にも理解し難いようだ。

―約一時間―

あのあと、イルカと触れ合ったりしてイベントは過ぎてゆき、既にお昼の時間である。

鹿野達は適当に展示されている魚達を鑑賞し、水族館を出た。

「今日はどこでお昼を食べる？」

「う～ん…あそこで！」

鹿野が指差したのは某ファミリーレストランの『ザ・ジョイ』。ここは別名”無情の喜び”という名が一部ファンによって付けられている。　ちなみにドリンク飲み放題は二百円。

「普通のラブコメなら、そこで弁当だが…」

松下は脳内の『常識フォルダ』から自身にとっての常識を取り出す。無論、一般人にとっては常識ではないことも松下にとっては常識として認識されていることもある。

「どんなラブコメよ？　それ」

「いや、この展開ならフツーは弁当を持参して相手を毒殺したりするのが常識だろ？」

「いや、そんなおぞましいことを真顔で言わないでよ…」

こんな常識離れを起こした人間を俗に『変人』と呼び、霊長類ヒト科である。一つ注意なのは露出狂などの『変態』とは性質がまるきり違う事を覚えておいて欲しい。

「で、俺らも行くんだろ？　『ザ・ジョイ』に」
「もちろん」
「じゃあさっさと行こうぜ。腹減ったしな」

そう言うと、恋愛応援部の一行はそのファミリーレストランへと歩いていった・・・

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ・・・

イベントの終焉と異常な寒気（後書き）

また上手く纏まらなかった…
いつか絶対改訂する！

昼飯と無駄な時間

会って、知って、愛して、そして別れていくのが幾多の人間の悲しい物語である。

サミュエル・コールリッジ

―ファミレス―

昼。大体十二時ぐらい。

なんだかんだで俺達は鹿野達を見守るついでに昼飯を食べに来たわけだが。

「……」

さっきから誰も喋らない。柊も水を飲むぐらいしか口を開かないという無口さ。

別に俺もそうなんだから人の事は言えないんだが、ファミレスで何も喋らないのはいささか虚しいものである。

とりあえずここで席順を確認しておこう。

テーブルは六人程座れる所で、無駄に大きな場所に五人が座る。男子が一列、テーブルを挟んだ向かい側に女子が占拠する。松下が窓側で真ん中に伊藤、廊下側に前田。　柊は窓側に、長嶺は廊下側だ。

しかし、やはり柊はやや伊藤と向かい合うように座り、長嶺に至っては既に前田の前。つまり、俺、松下は孤立しちゃうのだ。

「なあ」
「なによ」
「注文しないのか？」
「……貸しなさいよ」

無駄に柊はお怒りのご様子だ。やれやれ、起こると老けるっちゅうに。

「ほれ」

俺は柊に献立表を手渡した。その時の嫌そうな顔にすこし苛ついたが、その気持ちを押さえ込み水を一気に飲み干した。

「私は…パスタでいいわ。　沙羅ちゃんは？」
「私は…はい、柊さんと同じものでいいですよ」

注文するものを決めた長嶺は前田に手渡した。長嶺から受け取った前田はじっくりと料理を吟味する。
本当にどうでもいいが、俺のキモさは相当なもんなんだな。柊はこっちを見ないようにしているし、長嶺に至っては俺の存在を忘れているようだ。

「松下、ほれ」

漠然と外を眺めていた松下の頭に伊藤は献立表の角をコンっとぶつける。
その伊藤の姿を柊はジッと眺めている。ある一種の拷問か、と聞きたくなるなぁ…

「コイツでいいかな…」

目に付いた一番安い料理に決定した。金が無い今日この頃、節約せねばならん時代に入ってきたのだ。ああ忌々しい忌々しい。

松下は全員の注文する物が決まったので、手元にあるボタンへ手を運び押そうとした、その時―

「伊藤さんッ！！　『阻止』してくださいッ！！　彼のスイッチを押させてはならないッ！」

「な…なんだ？」

「うおぉぉぉッ！！」

伊藤が前田の叫びと共に松下の腕を掴むッ！！

そして、伊藤はこう叫ぶ。

「ＡＣＴ　３　ＦＲＥＥＺＥ！！　射程距離に到達した…Ｓ・Ｈ・Ｉ・Ｔ！」

「なにがなんだか良く分からんが…いいや！　限界だッ！　押すねッ！！」

「なにィィィーッ！！」

「今だッ！」

松下の掴まれていない左手を、その赤いボタンへと直進させるッ！！

その瞬間…奇妙な事が起こった。

「ハッ…！！　このスタンドは…柊か！？」

松下の左手を掴んでいたのは…柊のスタンドだった。

「そう…私のセーブ・ミー。伊藤の邪魔はさせないわ…」
「ちぃ…このクソカスどもがァーッ！！」
瞬時にウェザー・リポートを発動させ、柊のセーブ・ミーの腕を掴む。
ギリギリと力を込めながら腕を握っていく。
「観念しろッ！！」
「フン…どうかしら？　今よ！！」
「ち…」
一瞬の余裕綽々とした表示に気を取られてしまったのか、伊藤からの攻撃に対応が遅れてしまった。
「このボタンは俺が…押させて貰うぜ～。ポチっとな！」
次の瞬間、カウンターにピンポーン、という音が鳴り響く！　そして、僅か五秒も　経たずしてウェイトレスさんがテーブルのそばに経っていた。
「ご注文はァァァー！？」
「あ…と、シーチキンパスタ二つと、チキン南蛮と、ハンバーグと…えっと…」
「うどんだ」
全くこちらに興味を示さなかった長嶺が丁寧に応答するが、やはりと言うべきか…俺の注文を知らなかったのが少し悲しい。
「繰り返しますッ！！　シーチキンパスタ二つと後は以下略します

が、以上でよろしいですか？」
「以下略…って」
「よろしいですか？」
「はい…」

圧倒的な圧力に押され、何度も頷く。このウェイトレス…出来るな。

ウェイトレスさんは手持ちの機械になにやらピポパポし、カウンターへ戻って行った。
あとに残されたのは、無情な余韻だった。

「ふー。おいしかったわ。」

それから三十分が経過した。既に全員が食事を終わらせて満腹感を実感していた。
俺はうどんが来てから僅か七分で食ってしまった。もちろん七味をバリバリに投下しての想像を絶する戦いだった。

「なぁ、松下」
「なんだ？」

食後の満腹感を満喫しながら水を飲んでいる時、伊藤が話しかけてきた。最近よく話すなぁ…

「鹿野達、さっき出たぞ。行こうぜ」

早くそれを言えよ！

すぐさま席を立ち、会計を済ませて鹿野達を追った。

―図書館―

（鹿野…そろそろ四時間が経つ。ＳＯＰシステムがダウンするぜよ）
（え…つまり）
（告白しろ。あと一時間が限界だ）
（マジッ！？）
（ああ、大真面目にマジだ。さぁ、行け。一番良いところは図書館の奥の方の場所だ。あそこなら誰にも見つからん）
（キスは？）
（御勝手に。頑張れ）

鹿野達を探して六千里…一里を四キロメートルと仮定して、計算すると…二万四千キロメートル…を歩いて探すわけでもなく案外簡単に発見出来た。
彼女らはＳＯＰで聞いて見ると図書館に行くらしい。そう言えば図書館に行くとかなんとか行っていたな。

だが、問題がある。ＳＯＰがあと一時間しか使えないのだ。
別に人間の活動エネルギーから充電しているわけでもないので、ナノマシンのバッテリーが持たない。つまり、図書館でケリを付けてもらわないと困る。

ぶっちゃけて言えば、あまり今回はサポートをしていなかったのでプロポーズまでは行かせてやりたい。

「伊藤、柊、よく聞け。今から指示を出すぞって…イチャイチャするんじゃねぇよ！！」

ふと後ろの方を見ると、スタンドで伊藤を押さえつけている人物発見。もはやあれくらいのレベルに行けばヤンデレ認定もそう遠くはあるまい。

「いとーくん…」

「止めてくれぇ…」

心の底からこう思う。勝手にやってろ。

to be continued・・・

昼飯と無駄な時間（後書き）

ごめんなさい…

ストーリーが進まない。

ファミレスで鹿野達の描写を入れたかったのだがねぇ…キラークイーンが…バイツァダストが…発動しちまいまして…

わたしは…子供のころ…エッチなビデオってありますよね…

あの女優が淫らなことをしているのを初めて見たとき…なんていうか…その…下品なんですが…フフ…

『勃起』……しちゃいましてね……

任務とムカつきと告白。

私が今ここに立っていられるのは、人生を共にする女性が、愛とはどんなものであるかを教えてくれ、今も毎日それを示してくれるおかげです。

ｂｙトム・ハンクス

―図書館―

鹿野達はゆっくりと本を探していた。題名は『ソロモンの鍵』。魔法でも使いたいのかどうかは知らないが、確かに言えるのは…

そんな貴重過ぎる本はここの図書館には絶対に無い。

松下はそんな二人を見て、頭が痛い気がした。

「あいつらはバカなのか？　ソロモンの鍵なんざ、日本にあるわけないだろ…」

「おや？　なんか奇妙な本を取りましたね。…悪魔…の呪法…全書って…」

「どんだけ物好きなんだ？」

およそ高校生が読まない物に興味を示すあの二人の将来が心配になる。

そのうちカルト教祖でもなるんだろうか？その二人の状況を見て

みよう。

―鹿野達ｓｉｄｅ―

私は今、北尾くんの趣味というオカルトコーナーに来ていた。彼曰わく、『ソロモンの鍵』という本が見たいという。

もちろん私もオカルト趣味は持っていたりするので『ソロモンの鍵』についてはいろいろ知っていたりする。無論、翻訳版は家にあるので後で北尾くんを呼んで…ふふっ！

「あ、これはどうかな？」

私はおもむろに目に付いた本を北尾くんに見せてみる。

「悪魔の呪法全書か…家にある。それより、このエニグマっていう本はどうかな…」

「エニグマって…ドイツの暗号システム？」

「いやいやそのエニグマもあるけど、このエニグマは違うんだよ。この本、偶に人間の声がするらしいんだ」

「そうなの…？」

彼曰わく、エニグマの本は元々『杜王町』に寄贈された本のコピーらしい。なんでも、その本はある少年の人生が赤裸々に描かれており、読んだ人が感動してしまってそのまま印刷、販売されたという。

しかし、それはいわく付きらしく、読んでいる時に声が聞こえたり、本を破いたり汚してしまった時に叫び声が聞こえたりと、なかなか噂になっている。もっとも、確認がなされているのは杜王町のみらしい。

「この本は面白い。子供の頃から今までを細かく描かれている…。一つの人生の物語だよ」
「でも確かその本、最後が変なんでしょ？」
「うん。でも、その終わり方も斬新でこの本の主人公自身がこの本、”エニグマ”になるっていう、ある意味不思議な本なんだ」

彼はゆっくりエニグマを本棚に直した。彼の目はそれこそ、本に対する愛に溢れていた。

「行こっか？」

「あ、うん」

私達はオカルトコーナーに背を向けてその場を離れた。しかし、私は背後で奇妙な声を確かに聞いた。

『うぁ…うあぁ…』

と。

―松下ｓｉｄｅ―

松下と前田は鹿野達を追跡していた。…何故二人かと言うと、柊は積極的に伊藤を襲おうと任務を忘れて躍起になっていたからだ。そこで松下が発した言葉は、

「てめーは俺を怒らせた…」

その言葉を発する松下の額にはでかでかとムカつきマークが視認出来る程浮き出ていた。そこで松下は伊藤と柊を無視して捨て去ってきたのだ。一応歯止め係として長嶺を置いてきたが…

「あの二人…ことに伊藤君は生還出来るんでしょうか…？」

「わかんねえ…柊はスタンドを使うからなぁ。　今回はヤバいんじゃないか？」

「いいんですか！？　貞操の危機なんですよ！」

「ま、俺にはアイツの心情は分からん。モテて損するとか聞いた事ないからな」

「ああ…そうですか…」

あまりにも悲惨だ。だが同情はしても心情は知る気にはならん。要するに俺は知らん、ということだ。

ああ、ロミオとジュリエット見たいな悲劇を演じればいいじゃないか…

そんなこんなを考えながらオカルトコーナーを過ぎた事を確認した。そして次は…歴史コーナーだ。

（鹿野…次の歴史コーナーで告白してくれ。そこは完璧な四角で誰にも見られる事はないから）

（ああ…ついに来たのね）

（無論、俺達は見張っておくからな。心配する事はないぜ）

（うん）

（頑張れよ…幸運を）

（ありがと）

ＳＯＰで指示を下し、すぐさま前田と二人で歴史コーナーに至る道を塞いだ。

これまでの事が思い出される。公園、水族館、図書館…なんだ、マトモに働いてないじゃないか。なら今、すべきことをやろう。俺達の任務は恋愛を応援する事なのだから…

―鹿野ｓｉｄｅ―

（頑張れよ…幸運を）

そのリンクの接続者の松下に謝辞を述べ、決戦の地である『歴史コーナー』へ北尾を誘う為、自ら歴史コーナーへ歩みよった。

「えっと…北尾くーん！」

精神分裂症に関する本を読んでいた北尾は鹿野の呼び声に気づき、近寄ってきた。

私はこれから乗り越えるべき事柄を考えると鳥肌が立つ。でも、いつもそんな時は座右の銘であるこの言葉を思い出す…

『愛は行動なのよ、言葉だけで終わらせたことなど一度もなかった

わ。私達は生まれた時から愛する力が備わっているの。それでも筋力と一緒で、鍛えなければ衰えてしまうものなの』

私はこの言葉を思い出して考える。北尾くんをいつも影から見てきて、彼の良いところ、悪いところ…全て見てきた。

次は彼に私を知ってもらいたい。脳に刻んでもらいたい。これは傲慢なのかもしれない。それでも構わない。見ていては意味がない。知ってもらうなら行動するしかない。その気持ちが、私をつき動かす。

「北尾くん…聞いて欲しい事がある」

私は…

「ん…なに？」

彼の事を…

『好き』

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

告白とアドレスとフラグ

恋してからの最大の楽しみは、自分の恋を告白することだ。

ｂｙアンドレ・ジード

（…よくやった）

松下はその告白を傍受していた。今までの事も、エニグマも含めて全て傍聴していた。

正直こういう告白を他人に、しかもオタク&キモいというレッテルを貼られている俺に聴かれているというのは、鹿野にとっては恥ずかしい限りかもしれない。そりゃ俺だって恥ずかしいさ。他人の告白を聞くなんて。

でもそれを承知で頼ってくるなら覚悟を決めている。ドンと来い、恥ずかしい言葉。

（さあ、答えは吉と出るか…あるいは）

「…鹿野さん」

「はい…」

北尾はしばしの間を置いて、鹿野の名を呼ぶ。松下は声しか聞こえないが、その声は何かを決めたような落ち着き払った感じがした。

「僕は、今までの人生で女の人と深く関わる機会はありませんでした。あるのは本だけ、人間関係の構築なんて頭にすらありませんでした」

北尾は鹿野の目を見て、ゆっくり一つ一つの言葉を選んで話す。
「でもこうして僕の事を想ってくれる人がいる、未来がある。僕も君が好きです。付き合って下さい」
「……ッ！」
鹿野は自分の愛おしい人からの告白のＯＫをもらって、ついつい嬉しすぎて泣いてしまった。
そんな彼女を、北尾は何も言わずにそっと抱き締める。
松下はその会話を聞き、少し涙目になっていた。
「やれやれ、後はお前達次第だな。…帰るぞ～前田ぁ」
松下は前田にそう告げると、鹿野達から離れていった。
「あ、ちょっと待ってくださいよ～鹿野さん達はどうするんですか？」
「後は彼女達次第。俺達が出る幕じゃない。」
「ああ…って、伊藤君達はどうするんですか～？」
伊藤達は残していく。知るかあんな奴ら。何時までもＤ４Ｃでもしておけ。
―夜―
松下はただ一人、自宅で何もせずにいた。

まだまだ寒さは油断出来ないと、足をコタツに入れたまま何もしていなかった。その時、丁度電話が鳴った。メールだ。最初はやたらと大量に伊藤からのメールがあったので無視したな…と思いながらケータイを開いた。だが、違った。

「Ｕｎｋｎｏｗｎ…だと？」

そこに並ぶはｕｎｋｎｏｗｎの文字。件名は…鹿野か。

『今日は本当にありがとう。御陰様で彼氏が出来ました』

それに返信する

『いやいや、何もやってませんからｗｗｗ』

『でも、勇気をくれたじゃないですか』

正直今回は本当に何もしていない。伊藤と柊のせいで見事にお取り潰し。

一応その後のことを聞いてみた。

『あの後、その…キスとかして帰りました！』

『そうか、幸せにな』

『はい！』

やはり一番この部活をしていて良かったと思う時は感謝された時だ。それが一番嬉しい。

そして、何時も気になっている質問をしてみた。

『鹿野、あんたはどこから俺のアドレスを入手したんだ？』

それの答えは、至極簡単だった。

『禁則事項です♪』

―翌日の月曜日の朝にて―

只今六時三十分。下に降りて朝食を食す。献立はご飯ウインナーと目玉焼きというシンプルかつ栄養が取れる献立…。無論私には朝食を作ってくれる女子の幼なじみなぞいない。

この際文句は言わん、男でも良いし朝でもカレーを作る娘でも構わない。誰か来てくれ。

さてさて、朝食を食すと同時に皿を洗ってすぐさま登校の支度をする。ズボンを履きブレザーを着用。その時にケータイを開く。おや、メール件数と着信が数十件。

『何故逃げ出した、俺を置いて…』

『伊藤が逃げ出したわ、追うわよ!』

全て伊藤と柊だ。ありゃ、任務終了のメールは回したはずだが。

「…別にいっか。面倒だし」

取り敢えず来ていたメールと着信を全てチェック。…む、『小説家になりたい』からの更新通知か。お、好きな小説が更新されてる!電車で読もう。

そんな感じに時は既に七時十分、家を出る時間である。

そんな感じに家を飛び出し、急いで走る。その時、丁度目に入っ

た人物がいた。
「よ、おはよーさん。伊藤」
「うぉ！？　松下か…脅かすなよ」
伊藤の背中をバシッという軽快な音を出しながらブッ叩く。
「ま、それはそうと…松下、よくも昨日は見捨てたなぁ！？」
「友よ、それは仕方のないことだったんだ。不可抗力なんだよ」
「いや、それはないね、よもや松下に不可抗力は無い！」
「誉めてるように聞こえるが…」
イケメンはニカッと歯を光らせながらはにかむ。
一般的に女子はこういった行動に極端に弱いらしいが、それはイケメンのみに通用する事項であると俺は奇妙な確信を持って言える。もしキモメン&オタクの俺がやったら女子一人二人は気絶させる事は可能だろう。もちろん悪い意味で。
「まぁとにかく、慰謝料として何か奢れや。そうだな…モナコ！」
それは法外な物を要求致しますねぇ。出来れば俺の金銭面を重視してもらいたいのですが。モナカなら出来ますがね。
今の俺の財布にはカード数枚と七百円。二百円なら奢ってもいいな。
「じゃ、学校でパンでも…」

そう言いながら財布の確認をして歩いていた。そして角を曲がったその時ッ！

「キャッ！」

「うお？　ウェザーリポートッ！」

角を曲がった瞬間、偶然って言えばそれまでかもしれんが女子にぶつかってしまった。

その瞬間に反射的にウェザーリポートでエアバッグを女子側に設置したから怪我はない筈。何という紳士。

「痛って…」

「ふぇ？」

無論、俺の方にはエアバッグを作ってはいなかった為に転んだが、女子側は無事なようだ。…まぁ目を丸くしているが。

「あ～大丈夫かい？」

伊藤はおんにゃの子の方へ歩み寄り、手を差し伸べた。流石イケメン＆フラグマスター、何気ない行動の中でも笑顔を絶やさずに笑っている。だが、その優しさは『ただし、イケメンに限る』が付く代物。俺は使えはしない。

「あ…ありがとう…ございます…／／／」

「怪我はない？　痛む所とかない？」

「あ、助けてくれて…その、ありがとう」

「いやいや、助けたのは松下だよ」

「え？」

そう言うと俺の方を女子は見てきた。そして怪訝な表情をした。
わ、ムカつくぜ。
「助けたって…転んでますが」
「超能力で助けたんだよ」
「超能力…ですか」
「そ、超能力」

そして再び俺の方を見て、頭に『？』を浮かべた。
伊藤は伊藤ではにかんでいる。その時だろうか、伊藤は何かに気付いた。

「あ、その制服…絢爛学園かい？」
「はい、そうです」
「偶然だねぇ、僕も絢爛学園だよ」
「本当ですか！？　嬉しい…」

なんとまぁ、同じ学校でしたか。やれやれ、伊藤ファンクラブの会員がまた一人、それもプラチナ会員だなこりゃ。

「君、あっちから来ていたよね。引っ越して来たの？」
「はい、東京から来ました。あまりこの地に慣れていなくて…駅の方向が分からなかったんです。でも、あなたに会えて良かった…」

少女は顔を赤く染め、目をうっとりさせている。ああ、伊藤はなんて罪作りな男なんでしょう、次々とフラグを立てるなんて非常識にも程があります！　第一そのフラグは俺の物だったかもしれないのに…あ、やっぱそんなフラグイラネ。

溜め息を尽きながらケータイを開いた。そして俺は驚愕した。

「おいおい…そんなこんなしているうちに電車は発車してるじゃねーかよ！！」

「マジで！？」

「遅刻決定。次の電車は八時半だから後一時間後だわ…」

ケータイの時間は既に電車発車の時間を過ぎている。これでは学校に遅刻決定ではないか！！

これでは内申点に響いてしまう。それは避けたい。

「あの～よろしければウチの者に送らせましょうか？」

おお、コレは大天使セラフィムの救いか、この少女は親切にも我々を送ってくれるという。…まぁぶっちゃけこの人の責任なんだがね。

「元は私の責任ですし、それくらい造作もない事です。では今から執事を呼びますね」

よく分かっていらっしゃること。この少女はケータイで家に電話をして執事を呼んでくれるそうだ。・・・ちょっと待て、執事だと？

「ぉぉぉぉ嬢様ァ！　只今参りましたぞ！」

…なかなか速い。二分足らずだな。

流石執事、仕事は速い。車種はロールスロイスか。

「ささ、お乗り下さいませ」

「あ、はい」

伊藤は少女と一緒に後部座席に乗り、そのまま少女により『ドアを閉められた』。

「・・・はい？」

「行きますぞォ～！」

そのままロールスロイスはドヒュンと言う擬音と共に市街地を抜けていった。俺、つまり松下一人残して。

ただ一人残された松下は懐からケータイを取り出し、どこかに電話をかけ始めた。

「・・・あ、スピードワゴン日本支部？　急いでウチまでヘリか車を寄越してくれないか？　あ、うんそうそう。いや、遅刻決定だからさ…あ、来てくれる？　別に一時間目に間に合えば…うん、ありがと。じゃ」

スピードワゴン財団の通話を切り、次にメールを打つ。

『伊藤、後でしばく。覚悟しとけよ』

そのまま送信し、ケータイをズボンのポケットに入れ、とぼとぼ自宅に帰っていった。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

告白とアドレスとフラグ（後書き）

恋愛応援部っ！において、設定そのものを覆してしまう事実を確認しました。
作者の調査によれば、メールでの告白が直接逢っての告白より数倍多い。
リアルが充実している人全員に聞きました。
全員メールでの告白。どうしてこなた。
この小説は直接会って告白という前提があり、この事実は非常に衝撃的です。
よって、恋愛を昇華させる部活はしばし休み、通常の学園を展開させます。
まあこの小説読む人は極端に少ないでしょうから…あまり関係ないでしょうが。

とにかく、私は絶対にメールでの告白という文化は絶対に許しません。
古来よりの直接告白を尊重しますねぇ。だれか分かる人、居ませんか？

新章：松下和哉は動かない

独身貴族には重税を課すべきだ。幸せな男達がいるというのは不公平である。

byオスカー・ワイルド

―引き続き朝―

俺は無論遅れて登校した。スピードワゴン財団の車で送ってもらったのだがそれでも遅れてしまった。財団の人はヘリの方が速いと言っていたが、なにせヘリポートがない。

「一時間目は…まだ始まってはないな」

現在八時五十分。朝礼と礼拝も終了しているだろう時刻だ。あ、この学校はキリスト教系学校なので礼拝というものがある。主に聖書を読むぐらいだが。

そんなことはさておき、俺は階段を上がり、二年生の階まで到達。授業は九時からの開始なので大丈夫である。

そのまま教室まで直行し、ドアを開ける。

「……」

一瞬、侮蔑に満ちた女子による軽蔑の眼差しが俺を貫いた。

「あいつキモくね？」

どこからか言葉が聞こえてくる。まあいい。影でコソコソとしか言えないヤツよりは俺はキモくはないからな。無視無視。

「はやく死ねばいいのに…」

「しっ！　聞こえるって」

「別にいいのよ。あんなヤツに私達に反抗する強さなんてあるわけないわ」

やれやれ、此処の女子はクズばっかしだな。そんなに言いたけりゃ、真っ正面から来やがれ。

松下は視線を気にせずにズカズカと自らの椅子に座った。

まだ俺を見てコソコソ言っている輩もいたがそんな輩は完全無視を決め込み、机に伏せる。目をつぶると黒い世界が見え、所々に青やら赤やらが見えたり消えたりしている。

俺は一時間目が始まるまでそうしていた。

「松下ぁ、いや、今朝はマジでごめん」

ふと声が頭上から響いてくる。顔をあげると…なんだ、伊藤か。

「クラス内では俺に話しかけるなって、言ってるだろ？」

「いや、まあ…ごめん」

「心配せずとも処刑方法は考えておく」

「そ…そんなぁ～」

俺個人としては伊藤は愛すべき友であり親友だと思う。でも少しは人の雰囲気を感じていただきたい。

俺は目立たないよう、目立たないようにとクラス内で活動しているのに、伊藤がいつも絡んでは俺が女子の批判を浴びる。

小学生の頃の初恋の人が伊藤に本命のチョコをあげていた時には流石に殺してしまおうと思ったがね…

「あんな卑しい奴が…」

「そーそー、キモいよねぇ」

まだ言ってる。ま、どうでもいい。お前らみたいな人間にキモいと言われてもなぁ。

「元気だせって」

「だが断る」

考えてみれば、なぜ俺は此処まで女子どもに卑下されるようになったのか？　しばし考えて、理由はすぐに分かった。

『キモイくせにイケメンと仲がいいから』

要は女子の嫉妬なのだ。そうだ、全ては俺に対する嫉妬なんだ。つまり、俺を好きになる女子なんて居るわけがないし、寄り付きもしない。

仮にも俺を好きになったとしても、すぐに対象は伊藤に移っている。

「なんか…ごめん、保健室に行ってくる」

なんかその事実が今更突きつけられたら、途端に具合が悪くなった。特に腹が。

「大丈夫か？　送ってやろうか？」

「いや、そうなると後々面倒だ。先生に報告頼む」

「じゃ、報告ついでに途中まで送ってやるよ」

とりあえず、恐らくストレスによって引き起こされたであろうこの腹痛を抑える為に、二人で虚しく保健室へ行くのだった。

―残された者達―

「やっと消え去ったわ。良かった…」
「あんな害虫がいたら伊藤様が毒されちゃうからね」
「松下なんて死ねばいいのに」

松下が保健室へ行き、伊藤も先生に報告しに行ったあとの教室は、女子による安堵感が支配していた。

「ねぇ柊、あなたはどう思う？」
「はぃぃ！？」

柊は本を読んでいたときに突然話しかけられ、突拍子もない声を上げてしまう。

「ほら、あのゴキブリより醜い松下のこと、どう思う？　やっぱキモイよね～」

ゴキブリって…そこまでは、と思った。いや、流石にゴキブリよりはマジじゃない？　ノミ以外だけど。

「そう言えば…なんで松下を卑下してるの？　ずっと思ってたんだけど」
「ああ、あいつオタクだしキモイし。しかも家にエアガンが飾って

あるそうよ？」
「まぁ、キモイけど…」
家にエアガン…松下の事だから多分凄いのがあるんだろう。
例えば…本物？
「ま、あいつが金持ちなら見直してもいいんだけど」
「へぇ～」
「アイツの親が…そうね、スピードワゴン財団とかにいたら見直してもいいかも」
スピードワゴン…ん？　どこかで聞いたような…？
「スピードワゴン財団って、何？」
「それなら私が」
いつの間にか隣にいた女子Bが喋る。耳元で。
「スピードワゴン財団は日本で約五十人程しか入れない最先端医療財団です。年収は最低でも二千万。ありとあらゆる天才が集まり、科学技術の研究をしています」
柊の耳元で囁くために非常にくすぐったく感じてしまううら若き乙女。
「はいはい、止め止め。ま、松下はそんな事はないだろうから見直すつもりはないわ」
「まぁ…ね」
「はやく死ねばいいのにね！」

その言葉でクラスの女子は一斉に笑う。
ある者は伊藤を賛辞し、またある者は松下に対する悪口を言っていた。
男子のある者は松下を擁護し、女子と口論していたが何せクラス内の女子の数が多すぎる為に全員敗北を期していた。

「でも、去年卒業した直紀先輩は格好良かったよね～」
「松下直紀先輩だよね！？　あの人格好良かったなぁ～」
「でもどうしてあの格好良さが弟に引き継がれなかったんだろ」

彼女らの話に出てきている直紀先輩とは、去年卒業した『松下和哉の兄貴』である。
彼は格好良かった。律儀な男顔で男子からは兄貴と呼ばれ、女子からも絶大な人気を誇った人物である。
しかも、自らの恋愛にはあまり興味を示さずに他人の恋愛を成就させる『恋愛応援部』を立ち上げたのも彼だ。
そしてその弟である和哉も、『男子からは絶大な人気を誇る』のだ。

そんな論争にあまり興味を示さずに柊は本を読んでいる時、あることに気付いた。

（あ…松下にスタンドの事言うの忘れてた…。）

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

保健室にて

きれい事だけじゃない、人間にはまだいろんな面がある。愚かだったり、いやらしかったり、危険で悲嘆にくれるときだってあるんだ。

映画　カラー・オブ・ハートより

―保健室より愛を込めて―

「で、君は逃げ出してきた訳だな？」
「いえいえ、逃げた訳じゃないですよ」

今、俺は保健室にいる。
目の前に居るのは保険医の『比叡（ひえい）　聖（ひじり）』。名前は男顔負け必至なのだが女性だ。
だがね、ある意味凄いのよこの人。

「今失礼な事を考えてないか？」
「いえ滅相も御座いませんからそのメスを直してください」

この女医は凄く心を読むのが上手い。
そして失礼な事を考えていたら、すぐさまメスを取り出してくる。
メスは学校には必要ないだろうに。

「フー、私は少し低血圧なんでな。ちと冷たく接するが構わないな？」

別に万年筆で攻撃してこなければ、それでもいいです。
いや、万年筆よりメスを投げてくるか。投げて来たら命は無いだろうな。

「で、君はどうした？　どこか具合が悪いのか？」
「あ～腹がチクチクっとするんです」
「盲腸か？　腸捻転か？」
「そんな大層なモノじゃないと思います…」

とりあえず今日の事を先生に話してみた。
すると以外にこの先生は興味を示してくれた。

「なる程、君は女子に非難されているわけだ。特に顔」
「強調しないで下さいよ」
「気にするな。まぁ…私が直に言うのも酷いと思うが、君はハッキリ言ってキモい」
「……ハァ」
「それだけはハッキリわかる。君は性格も素晴らしく、人格も良い。頭も無駄に良い、更に射撃に関しては天才的だ」
「…何故に射撃の事をしってるんですか？」
「…これだけの能力を有しているなら確実にクラスの人気者になれるのは間違いない。
しかし…やはり顔が・・・」

自分自身でもつくづくそう思う。
まぁ射撃能力の事を知られているのは衝撃的だが、別にいい。
頭がいいから？　性格がいいから？　確かにそういったスキルは恋愛の対象にはなるだろう。
だが…人間は見た目で全てを選ぶ。いくら『人間は中身』と言おうが、見た目が良くなければ無駄なのだ。

ブサメンがこの世で生き抜くならば、必ず恋愛を捨て去る。ブサメンがモテるのはドラマや小説ぐらいだ。ブサメンはまともに生きては行けない。

「やはり顔…か」

別に俺はモテたいんじゃない。ただ充実した感覚が欲しいだけなんだ。

それはスタンド能力として覚醒させる要因にもなった。

他人が持っていないモノを持つ事に、優越感を覚えた。

だが同時に無情な悲壮感を感じた。何故なら、このスタンドが見える友達は誰もいないのだから…。見えない人間と真に気持ちが通うはずがない。

「君の腹痛の原因はストレスみたいだな」

「…はい」

「『必要とされないなら、必要とされる人間になるように努力しろ。』これは君より少し人生を生きた人間の戯れ言だと思ってくれ」

彼女なりに励ましてくれるのは正直嬉しかった。

その時、スピーカーからチャイムが鳴った。一時間目の終了を告げる音だ。

かれこれ四十五分は話していたことになる。

「さて、一時間目が終わったな。帰れ」

「ハッキリ言いますねぇ」

「ま、暇つぶしにはなったからな」

松下は少し乱れた制服を整えて保健室のドアを開けた。

「では、先生」
「おう、また来な。相手してやるよ」
その言葉を聞き届けた後、ドアをピシャリと閉め、自らの教室へ歩いて行った。

幼女と俺とスタンドと（前書き）

警告

今話は非常に変態に仕上がっております。
人によっては非常に気分を損ねる危険性がありますので、観覧する際にはご注意ください。
いくら変態だからと言っても作者を警察に通報はしないでください。
ただのネタ小説みたいなものですから…

幼女と俺とスタンドと

今まで俺がやってきたことはなにもかも、俺が夢見たことに比べたらつまらないものだった。
でも俺はこの絆を断ち切ることも否定することもできない。俺が今まで生きてこれた理由はただ1つ、お前がいてくれたからなんだよ。
夢はまだ終わっちゃいない。
＞出典：2ちゃんねるまとめサイト＜

―放課後、第二文化室―

『あ…こんにちは』
「…こんにちは」

現在、スタンドと会話している。
い…いや、会話したというより全く理解を越えていたのだが…
あ…ありのままを話そう。
『俺は柊にスタンドについて話せと言ったらいつの間にかスタンドと会話していた』
な…何を言っているのかわからねーと思うが俺も何を言いたいのかわからない…
頭がどうにかなりそうだった…
催眠術だとか幼女だとかそんなもんじゃ断じてねぇ…もっと違法性の高い片鱗を味わったぜ…

『あの…』

さて、話を戻そう。
目の前には『幼女』がいる。髪が長く、胸は皆無の幼女だ。

『私が見えるの？』
「あ…ああ。見える」

まぁなんて言うか…ロリ。
正にその一言に尽きると思う。
しかし、何というか現実味が少ない。
正しく言えば二次元キャラクターがそのまま出て来た感じの、言わば３Ｄ。ボヘミアン・ラプソディーか？

「柊…お前のスタンドはコイツで間違いないな？」
「ええ。その子よ」
「…マジすか？」
「ええ」

なんか一歩間違えてしまえば禁断の『自主規制です』にハマったり『禁則事項です♪』に陥ったりしてしまうかもしれない。
それくらい反則的に可愛い。しかも若干浮いている。

『あの～』
「あ、はい」
『何の用ですか？』
「そうだった。君の能力について聞かせてくれ」
『能力～？』

首を傾げている。やはり小さな女の子には無理だったか…

『ごちゅじんちゃまぁ～、能力ってなに～？』
「能力ってのは、あなたの得意な事よ。さ、この人に見せなさい」
『ふぇ～い、分かったぁ～』

か…可愛い…
俺の保護欲を駆り立てられる…反則だッ！！
俺はロリコンじゃないのに…萌える…。俺の心がきゅん…となっちまうじゃねえかチキショウ、と俺の心は泣いた。

『あのね、”みちる”のね、能力はね』
「ちょっと…”みちる”ってのは？」
『”ごちゅじんちゃま”がくれた私の名前』

はて…セーブ・ミーじゃなかったか…？
ふと柊の方をみると、

「その子自体の名前よ。これからセーブ・ミーは能力名にするわ」

理解した。要するに、スタープラチナがスタンドの名前で、スタープラチナ・ザ・ワールドが能力名と同じ訳だな。

「じゃ、みちる。教えてくれ」
『みちる”ちゃん”って呼んでくれなきゃヤダぁ～』
「……」

その…みちるは柊のスタンド、つまり柊そのものな訳だよな。柊はそのように言われたい願望があるのか…という風に柊を見たら殺すと言わんばかりに睨まれた。心を読まれたようだ。

「じゃ、みちるちゃん。聞かせてくれ」

『うん、みちるの能力は簡単に言えば人を癒やすの』

みちる曰く、

1．マッサージの神

2．美容健康その他オールラウンドに対応

3．そんじょそこらのマッサージチェアには負けないんだから！！

4．みちるの魅力でみっるみっるにしてやんよ～

…理解は出来る。要はマッサージが絶妙に上手い訳だな？

だが3．4がよく分からん。みっるみっるにしてやんよ～って何よ？

『歌だって歌えちゃうんだから！』

「…おう」

前話までシリアスに来ていたのに見事にぶち壊してくれた。これじゃ批判が来てしまうじゃないか…

もしくは『みっるみっるにしてください！！』なんて来たらどうする気だ？

「みちるちゃんは柊のスタンドだよな？」

『うん！ごちゅじんちゃまのスタンドだよ！』

「もしかして自立型？」

『…？　わからないけどきっとそうだよ』

「…ああ、分かった」

実体化はしていないようだが、成長はするのだろうか？ううむ…

「柊、お前はこの子の何だ？」

「な…なによ、私はその子の本体よ」

「だよな」

とりあえず能力は理解したからまぁいいか。
後はこの事を先生と伊藤と前田とスピードワゴン財団に報告しよう。
長嶺には言う必要はないだろう。

くいくい

くいくい

後ろでみちるは俺の制服の袖をくいくい…と引っ張っている。
そして上目遣い。

『お兄ちゃん…みっるみっるにしていい？』
「な…なにを？」
『もちろん…心をね♪』

ズキュウウンーッ！！
その瞬間…俺は全てを悟った。
この世の幼女の素晴らしさ、可愛さ、全てを取ってもこの学校にいる女子を遥かに上回っているッ！！
クオリティが高い３Ｄのような姿をしているみちるはその頂点に立っているのだッ！！
しかも幼女だからこんなキモオタの俺でも分け隔てなく接してくれる…こんなに嬉しい事はない…。
読者には感じてくれるだろう、幼女の素晴らしさが、ロリコンの素晴らしさがッ！！
児童ポルノ法なぞ関係ない、俺は俺の意志を貫くッ！！

「は…俺は一体何をしようと…」
「…あんた、ロリコンだったの…？」

「…？　いや、別に」

何故かは知らないが…奇妙な感覚があった…
さして言えば、今日のボスは爆死的な何かが。

「はぁ…帰る」

朝から何か奇妙な感覚を味わうなぁ…
朝は容姿的事実を突き詰められ、放課後は一人犯罪に走ろうと…
そろそろパトカーが呼ばれてもおかしくないかもしれない。

「帰るの？」
「まあな。結構疲れたから今日はさっさと帰らせていただくよ」

おかしなやつね、と柊は呟き、俺はそれを聞き流しながらドアを開け、職員室へ歩いていった。無論先生に報告しに行くわけだが、どう説明すればいいのか…悩む。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

伊藤と前田と青春

やる気をすっかりなくさない限り、失敗はあり得ない。
「自分の内部から生まれる敗北」以外に敗北はない。
「心の弱さ」以外に超えられない障害などない。

エルバード・ハワード

―伊藤ｓｉｄｅ　前話から二日後―

最近松下の様子がおかしい。
いや、どこがそうとは言えないんだが、どこか調子が狂ってしまう。
この前だって松下を置いてけぼりにしてしまった事を謝りに話しかけてみたらあっさり一蹴されてしまった。
柊のスタンドの事だってメールだし。いや、別に嫉妬じゃないのよ。男だし。
ただ、どこか調子が狂ってしまう。
「むう・・・」
いまは下校中だ。この無駄に長い絢爛坂を下っている。
この坂は本当に長い。体育の授業の一環としてこの坂をダッシュで往復させられるという、ある意味地獄のようなことをさせられたのは記憶に新しい出来事だ。全員がぶっ倒れたのもだ。
下り坂を歩きながら、なんとなく考える。
松下と最初に出会ったのは中学校の一年の頃だ。松下は小学校は違うので面識はなかった。
俺は小学校のゲーマーとメタルギアソリッドというゲームについて討論していたんだ。そのときにその話に加わったのが、最初だっ

た。
その後は班が同じになったり、給食をどちらが多く食べられるか競い合ううちにだんだんと仲良くなっていった。
それからというもの、事あるごとに接する機会が多くなってお互いが親友と認められるようになっていった。
だから今回、松下の奇妙な様子に気づけたんだ。
「何があったんだろ・・・」
「どうしたんですか？　伊藤君」
真後ろから声が聞こえた。
振り返ってみると・・・前田だった
「こんにちは。伊藤君」
「ビックリさせんなよ・・・」
この前だという奴は神出鬼没なやつだ。俺が何処にいようと先回りしている・・・というより其処にいる。前にスタンドでも持っているのか、と聞いたんだが『気のせいですよ』と一蹴された。
「一人ですか？」
「まあね」
「じゃ、一緒に帰りましょうか。ハンバーガー、奢りますよ」
「ん・・・分かった」
特に断る理由も無かったので、とりあえず前田と一緒に帰ることにした。

―某有名ハンバーガー店―

一般的に『マック』とか言われる有名チェーン店にきた俺達は適当に安いものを注文して席に座った。
周りはカップル（他校の高校生）や宿題をやっている人など、たくさんの学生で溢れていた。その中での唯一のテーブルが空いてい

たのは幸運だった。
「松下さんがいたら悶絶するでしょうね」
周りからはカップルのリア充満点の会話が聞こえてくる。確かに松下がいたら悶絶するな。もしくはスタンドで黙らせるか。
「でも松下さんはそのリア充を応援しているのですから、おかしなものですよね」
確かに。
「伊藤さん、何か悩んでるんじゃありませんか？」
「な……」
「図星ですか」
前田はにやりと笑った。
「あなたの顔を見てれば分かりますよ。何を悩んでいるのかは知りませんがね」
「顔に出てる？」
「ええ。デカデカと顔に書いてあります」
とりあえず落ち着こう。深呼吸深呼吸…っと。いや、波紋法か…まあいいや。
ハンバーガーをひとかじりし、ついでにポテトとジンジャーエールを一口し、飲み込む。
「話してみてはどうですか？　悩みを」
「まぁ・・・」
「小さいうちに潰しといた方がいいですよ。大きくならないうちに不安要素を取り除いくのが一番です」
確かに、その通りだ。
悩みもストレスになる。大きくならないうちに刈り取った方が良いかな。
一呼吸間置き、気持ちを固める。
「最近、松下の様子が変なんだ。なんかこう…他人を近づけないオーラを発しているというか」
「そうですか・・・」

「長年松下を見てきて分かる」
前田はポテトを口に運びながらジッと伊藤の話を聞いている。
「前田は何か知らないか？」
「・・・あることはあります」
「何だって？」
俺はついつい聞き返してしまった。
前田は何かを知っているのだろうか？　疑念は深まる。
「多分・・・これが原因でしょうが…」
前田は渋るように考えている。原因・・・か。
「これは二日前…朝、一時間目が始まる前のことです」
「それは…確か具合が悪いからって松下が保健室に行った…」
「ええ、話は保健室の女医さんから聞いた事ですので」
何故に女医から聞いたんだ、と聞きたいが多分また一蹴されるのでやめておく。
彼の情報収集能力は凄まじいからな、野暮なことは聞けない。
「そして伊藤君、あなたも関わっています」
「なんだって？　俺が？」
「はい」
し…衝撃だ。
「話によると、大体は貴方のせいかも知れませんが…」
「どゆこと？」
前田は一息入れ、ゆっくりと口を開いた。
「彼は自分の容姿に対して絶望しているんじゃないかと。貴方も知っての通り、絢爛学園は男子の総人数がかなり少ないですよね？」
「ああ」
「それゆえ、女子の恋愛競争は激化します。一人の男子を狙っている女子が十人を超える事さえあります」
そう、男子の数が極端に少ないが故に物凄い倍率が発生する。無論、モテない奴はとことん倍率が低く、かっこいい伊藤や前田のような男子は狙っている女子が恐ろしい数になる。

しかも女子生徒の大半は会社令嬢や富豪の娘であるから諦めが悪い。多分欲しい物は手に入れるタイプがやたら多いのだ。
他校の生徒に恋愛すれば良いのに、と言ったところ『あんな貧乏人と恋愛するなんて理解できませんわ』だと。
「まぁある意味ここの学校は凄いからなぁ」
「まったくです。こっちは苦労するってのに…」
ある意味リア充発言はスルーした。
「その、俺のせいってのは？」
「ああ、すいません。朝、彼は容姿に関して悪口を言われていたそうで・・・それが貴方と話したからだと」
「…俺のせい、か」
思い返せばあの時、『話しかけるな』と言っていた。つまり・・・
「ええ、極力女子と関わらないようにしていたのでしょう。彼は女子が嫌いですからね」
「そうか・・・あいつに謝らないとな」
だんだんと悩みの氷が氷解してきた。
あまり目立ちたくない奴だったもんな・・・
「私から見れば松下はかっこいいと思いますがねぇ」
「女子との観念の差があるんだなぁ」
ハンバーガーはいつの間にか残り一口しか残っていなかった。ジンジャーエールとポテトは既に腹にて絶賛消化中だ。
とりあえず最後の一口を口に放り込んだ。
「謎は解けましたか？」
「…ああ、大体」
「それはよかった」
前田は席を立ち、ゴミを捨てに行く。
俺も自分のゴミを捨てるために席をたった。
ゴミ箱にゴミを入れ、ジンジャーエールの氷も分別して入れる。
「帰りましょうか」
「そうだな」

そろそろ六時だがうっすらとまだ明るい。季節は春だが、日は傾くと少し肌寒いものだ。
悩みを解決してくれた前田に感謝しよう、素直にそう思えた。
「ああ、伊藤君」
「ん？」
「次は奢ってくださいよ？」
「奢りじゃねえのかよ！」
それは、まだまだ青春の真っ盛りの春の記憶だった。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

伊藤と前田と青春（後書き）

今回はパソコンで書きました。
やっぱりパソコンのほうがやりやすいね。
縦書きでパソパソと。
では。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0358k/

恋愛応援部っ！

2010年10月11日03時07分発行